
リリカル×フィアンマ

ミカサ(打ち止め)

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リリカル×フィアンマ

【Nコード】

N2695Q

【作者名】

ミカサ（打ち止め）

【あらすじ】

中学2年生だった沢田綱吉は、今や高校3年生。数々の試練を乗り越え、ボンゴレX世になる一年前、ボンゴレI世の遺品である、二つのリングを手に入れる。そのリングが、新たな試練を呼ぶ

標的1：卒業（前書き）

完結できたら良いです。

まあ、あせらず頑張ります。

ではどうぞ

標的1：卒業

日本のとある所にある、極々普通の住宅街、並盛町。そのとある家の部屋に、茶髪で、人が良さそうな少年がいた。

彼の名前は沢田綱吉（通称ツナ）。並盛高校に通っている17歳だ。学力並、運動神経並（これでも昔の数倍マシンのだが）、ルックスだけが童顔で良しといった、極々普通な高校3年生だ。しかし、彼は世界最大規模を誇るイタリアマフィア、『ボンゴレファミリー』の10代目である。

そんな彼の物語は、いつもどおりの自室で、いつもどおりの変わらない日常から始まる

「今日でイタリアに帰るぞ」

「は？」

オレは家庭教師兼殺し屋の赤ん坊、リボーンの発言に、思わずまぬけな声を出してしまう。

呆然としているオレを他所に、リボーンは話しを続ける。

「最初に言っただろ。お前を『マフィアのボス』にするのがオレの仕事だつてな。お前はまだまだダメツナだが、一人でもやっていける最低限のレベルはあるし、もうオレが教える事は殆どないからな」
よく考えれば当然かもしれない。

中2の時に起こったあの『事件』で、オレは、ボンゴレファミリーのボスになった。が、高校を卒業するまで全権を9代目に任せている。そしてオレは今年で高校を卒業する。つまり、名実共にボンゴレ10代目となる事になる。そうなると家庭教師であるリボーンも御役御免となるのは自然なのだが…。

「ちよっ！急過ぎないか!？」

いつかこの日が来ると覚悟を決めてはいたが、流石に今日いきなり帰るのは予想外だった。

「急じゃないぞ。前から決めてたからな」

「だ・か・ら!その時に言えっつて!」

「ごちやごちやうるせーぞ」

リボーンは拳銃をツナに向ける。二人にとってはお馴染みの光景である。もっとも、ツナにとってはいつまで経っても慣れないのだが。

「なっ!やめろっつて!」

これまたいつものどおりのリアクションのツナ。

リポーンに出会ってから、確かに強くはなった。しかし、ツナは全く変わらない。そんな姿からは、彼がマフィアのボスだと全く感じさせない。

だが、そんなツナだからこそ、選ばれたのだ。

誰よりもボンゴレボスに相応しい、大空に

「ところで、お前に渡したい物がある」

そう言っつてリポーンは小さな小箱をツナに手渡す。

「これは…?」

小箱に入っていたのは、獅子の装飾が施された、深紅の二つのリングだった。一つは雄獅子、もう一つは雌獅子のリングだ。

「これはオレからの卒業祝いだ。何でもボンゴレイ世の遺品で生涯身につけていた代物らしいぞ」

「ま、まじで!?!」

遠い先祖であり、ボンゴレの創始者の遺品であるリングをまじまじ

と見つめる。

「良いのか？こんな価値のある物を俺に…」

ボンゴレイ世はマフィア界伝説の男だ。その彼の遺品であるこのリングは、決して値段を付けられないなんてレベルじゃないだろう。

「お前だからだぞ、ツナ。元々、家光から譲り受けた物だからな。お前にこそ相応しいモンだ。それに…、お前はオレが受け持った生徒の中で、最も面倒がかかって、最も誇りに思える生徒だからな」
後ろを向き、帽子を深く被り直すリボーン。こいつは普段感情を表に出さない。だけど、付き合いの長いオレには解る。今、リボーンが何を考えているかを

「リボーン…」

オレの頭の中で、リボーンとの思い出が駆け巡る。

数え切れないほどの思い出。

辛かった時も、苦しかった時も、楽しかった時も、いつも一緒に歩んできた。

リボーンがいたから、今のオレがここにいる。

目から涙が留めなく溢れる。

そして

「ありがとうございます！！」

オレは初めてリボンに頭を下げた。

この日、沢田綱吉は家庭教師兼殺し屋、リボンから卒業をした

標的1：卒業（後書き）

ミカサ「いやあ、お久しぶりです。ミカサです」

ツナ「えっ、誰？」

ミカサ「…まあ、覚えている人も、忘れた人も、初めてな人もよろしく願います…」

リボーン「なんか哀れだな」

ミカサ「まあ、それはさておき」

リボーン「話しそらしたな」

ミカサ「獅子のリングの装飾は、仮面ライダー0000のライオンメダルと、チーターメダルと同じような模様です」

リボーン「他の作品出たな」

ミカサ「因みに、デバイスの言葉は日本語にしますのであしからず」

リボーン「バカだからな」

ツナ「もう止めてあげて!!」

ミカサ「ふっ…あの空白の時間に比べれば何でもないさ…」

リボーン「取りあえず、まだプロローグは続くから飽きずに見てく

れ

ツナ「それじゃ、これからのリリカル×フィアンマを……」

全員「よろしくお願いします!!」

標的 2：獅子のリング（前書き）

まだ管理局側は出ません

標的 2：獅子のリング

リボーンがイタリアに帰って早一ヶ月。あっという間に時間が過ぎて行った。

最初は変な感じだったけど、もう大分慣れてきた。

でも、たまに間違えてリボーンの名前を呼んでしまう辺りは、やっぱりまだ吹っ切れてないということなのか…。

だけど、いつまでもうじうじしてばかりではいけない。顔を上げて前に進まなきゃ、リボーンに怒られてしまうから

「ツナー！遊んでやるもんねー！！」

「ぶっ！」

休日、まったくと過ごしていたら、いきなり活きよい良くドアが開いたと思った次の瞬間、何かがつナの背中に突っ込む。

「何すんだよっ、ランボ！」

痛む背中を摩りながら、突っ込んできた物体に振り向く。

突っ込んできた物体は、ツナの弟みたいな少年、ランボだった。

ランボは沢田家の居候で、かれこれ6年近くになるが、ツナに対する態度は一向に良くなるらない。まあ、傍から見れば仲の良い兄弟なのだが。

「殺し屋ゲームやろうぜ！」

…相変わらず遊びのチョイスがヤバすぎない？

8歳児が手榴弾を持って殺し屋ゲームをせがむ…。

…シユール過ぎる。

「ねーねー殺ろうよー！」

「いやいやいや！字が違うだろ！！！」

そんな遊びを超えたものをやったら、またオレの部屋は確実に飛ばぶだろう。それはなんとしても阻止しなくてはならない。因みに、二桁を越えた時から数えるのを止めた。

ランボにせがまれ、困っていると

「ランボ！ツナさんを困らせちゃ駄目でしょ！」

「い、この声は…」

聞き慣れた澄んだ声が部屋に響き、ランボは思わず後ずさる。

その声は、オレにとって女神の声にも等しかった。

声の主である、みつあみの少女、イーピンは腕を組み、仁王立ちでランボを睨みつける。

「いつまで経っても修業場所に来ないから帰ってみれば!」

「い、いや、これには深い訳が」

「問答無用!」

「ぐひゃ!」

イーピンの右拳が、ランボの顔面に突き刺さる。

あまりにも強烈な一撃にうづくまるランボ。普通の人だったら、下手をすれば鼻が折れてしまいかもしれないが…。

「が・ま・ん…。うっ…うわあああん!」

派手に泣いているがなんともない。この高い防御力がランボの一番の能力だが、流石に痛そうだ。

「大丈夫か、ランボ?」

鼻の頭が擦りむけていたので、絆創膏を貼ってあげる。

「ツナさん、ランボに甘すぎですよ!そうやって甘やかすから、いつまで経ってもヘタレのままなんです!」

もの凄い剣幕で詰め寄るイーピンに、少し圧倒されてしまう。

「い、いや……。ちょっと厳しくない……？」

「ランボは『雷の守護者』なんですよ！これでも足りないぐらいです！」

そう言うとイーピンは、泣きわめくランボの襟を掴み部屋を出ていく。

オレが言うのもなんだけど、イーピンは姉さん女房になる気がする。

しみじみと妹みたいなものの成長を感じていると、イーピンがぴよんとドアの間から顔を出す。

「ランボの事、悪く思わないでくださいね。一応、バカはバカなりでツナさんの事気遣かっているんですから」

ドアを閉め、今度こそ出かけたみたいだ。

二人共成長したな……。

つい、弟みたいなものと妹みたいなもの（同じく）の成長に、感慨深くなってしまった。

一人になり、ツナの部屋は静寂に包まれる。そして、オレはテーブルの上にある物を置く。リボーンから譲り受けた小箱だ。

今まで、リボーンの事を吹っ切る為、無意識の内に遠ざけていた。

でも、もうそれはやめる。

弟達に気を遣われ、気付いた。

何も前に進んでいなかった事に。

リボーンが居ない事に無理矢理納得しようとしていたことに。

そして、それから逃げようとしていたことに。

小箱を開け、リングを指に嵌める。

雄獅子のリングを人差し指に、雌獅子のリングを薬指にと、大空のボンゴレギアを挟むように嵌めた。

マフィアにとって、リングは単なるアクセサリーではない。勿論、ツナにとっても同じだ。

ある物は絶対的権力の象徴。

ある物は凄まじき力を秘めた秘匿。

ある物は獣の魂を宿す奇跡。

リングがあるからマフィアが存在し、マフィアがあるからリングが存在すると言っても過言ではないのだ。

中でも、73（トゥリニセツテ）と呼ばれる特別な21個のリング。その中のシリーズ、『ボンゴレギア』を所持しているのが、オレ達ボンゴレファミリアだ。

そのボンゴレファミリアの創始者が、ボンゴレギアの前シリーズである、『ボンゴレリング』と共に身につけていたリングだ。特別な力を持っていたとしても、なんら不思議ではない。

深呼吸してオレは、覚悟を決め、二つのリングに炎を燈す。

瞬間

『『契約を交わした』』

「ぐっ…！な…んだ…よ…これは…？」

突然オレの頭の中に、正体不明の音が響き、緋炎の輪がオレを取り囲んだ。

『我等に刻まれし』

『主との盟約』

標的2：獅子のリング（後書き）

ランボ「後書きだもんね！いやっふ〜い！わーわー！」

イーピン「もうランボ！そんなに騒がないのー！」

ミカサ「すっかり10年後の姿に成りつつあるお二人です」

ツナ「あんなにチビだった二人がなあ…」

ミカサ「オツサン臭いぞ、ツナ…」

ツナ「なっ!？」

ランボ「全然変わんないのが、ツナの良いトコなんだけどねー」

イーピン「くすくす ツナさんお父さんみたいですよ」

ツナ「そうかな？」

ミカサ「実際に、兄みたいな存在だもんな」

ランボ・イーピン「うん！」

ツナ「うっ…。ちょっと照れ臭いな…」

イーピン「そろそろ終わりの時間が近づきましたー！」

ランボ「これからもオレ達を…」

全買「よろしくお願ひします!」

標的3：初代の意思（前書き）

そこ、なんか似てるとか言わない！

あと、本文より後書きのほうが書くのが楽しい

標的3：初代の意思

…きろ…ち…も…

母さん…？今日は学校休みだよ…。

…で…も…

しつこいなあ…。もうちょっと寝かしてよ…。

「起きろ！X世（デーチモ！）」

「はいつ！？」

大声で名前を呼ばれたツナは、思わず飛び起きた。

あれ…、オレ、部屋でランボ達と一緒にいて、それから……………。

まだ頭が覚醒しておらず、寝ぼけ眼を擦り、ぐっと体を伸ばす。そして気付く。自分が『とんでもない場所』に立っている事を。

「何だこれー！ー！ー！？」

見渡す限りの空、空、空。ツナが立っているのは空の上だったのだ。

「落ちるー！誰か助けてー！！」

まだ死にたくないって！まだ彼女いない歴〓年齢なんかでくたばり

たくないー！

「…今さら何を言っているんだ…」

誰かが呆れた様子で溜息を履く。

その人物は、ツナにとって忘れる事の出来ない者だった。

「なあ！？あなたは！」

その男の姿に、オレは思わず声をあげる。

体を覆う漆黒のマント

圧倒的存在感を放つ両手のグローブ

額に煌めく橙色の炎

そして、全てを見通すか如くの金色の瞳

「久しいな…、X世…。お前が14の時代以来だな」

ツナと瓜二つの男は顔を少しだが、顔を緩ませる。

彼こそが、伝説のボンゴレファミリー創始者、『ボンゴレI世』であつた

「えーと…、なんであなたが？」

Ⅰ世とは、面識があるといっても、滅多な事では会う事はない。そもそも彼の生きていた時代は、今から約400年程前だ。

今起こっているのは『奇跡』

ボンゴレギアの『縦の時空軸の奇跡』によつて、引き起こされた神秘なのだ

と、言つても、上記の通り、ツナは最大級の窮地の時しか会つた事はなかった。これが何を意味しているか解らない程、ツナは愚かではない。

「…オレに何を求めているんですか？」

「察がいいな、Ⅹ世…。お前に頼み事がある」

やっぱりか…。

争い事は真つ平だけど、今まで助けてもらつた恩もあるし、何より彼はオレの御先祖様だ。無下に断る事は出来ない。

Ⅰ世は言葉を紡ぐ。

「お前は何の為に戦つ？」

I世の言葉に、オレは迷う事なく答える。

「オレは…、友達…、仲間の為に戦いたい。大切な人達を守りたいんです」

今も、昔も、そしてこれからも、決して変わる事がない、シンプルな、『たった一つ』の理由。その思いを胸に、ここまで来た。この思いだからこそ、ここまで来る事が出来た。

「なら、大切な人の大切な人はどうだ？」

「へ？」

「その人の、大切な人の大切な人は？」

「そ、それは…」

I世の質問に、答える事が出来なかった。

戦いで、全ての人を守る事は難しい。はっきり言って不可能だ。

現に、ツナの今までの戦いで誰も傷つけなかった事は無い。寧ろ、全員がボロボロで、ようやく勝てたのが普通だった。

ましてや、赤の他人だ。

人は守ろうとする心で強くなれるのだ。

そんな事、絶対に無理だ。

そんなオレの表情を詠んだのか、I世は話しを続ける。

「ああ、不可能だ。そんな事は絶対に『出来なかった』」

「ん？」

オレはI世の言葉に、違和感を感じた。

『出来なかった』

まるで、かつてそれをやり遂げようとしたような発言だった。

「あなたは…、まさか…」

「ああ。やろうとした…」

悲壮感が顔を崩す。…正直、見ているのが辛かった。

「最初は友、次に街、次はファミリー、次はイタリア、そして、最後はヨーロッパだったか…。最初は小さな事だったかも知れない。だが、オレはそこまで出来た人間ではなかったらしい…。全くの他人であつても、困っている人を救わずにはいられなかった」

確かに、彼は多くの人々を救った。

例え、己の身を擦り減らす事になつても、彼は躊躇はしないだろう…。

「…だがな、どうしても救えなかった、杯からこぼれ落ちてしまった命が在った。だからこそ、そんな命を救う為に、オレは強くなっ

た。『異世界』の力を使つてな」

「異世界…ですか」

思いもよらない単語に、オレは聞き返す。

「ああ、そつだ。その力を使い、オレは誰よりも強くはなつた。だがな、少しずつだが、不信任を抱く者が現れた」

その人物は、オレにも解つた。

D・スピード

初代霧の守護者でありながらI世を裏切り、時代を超えてもなお、オレを消そうと罫を張り巡らした、ボンゴレ史上、最大最悪の裏切り者

「『みんな』を守る…。その一つの理想を追い掛け、死力を尽くした。しかし、待っていたのは仲間の裏切りと、掛け替えの無い親友の死だ。それからは…、お前の知つての通りだ」

ボンゴレを追われ、力を失い、失意の中で日本で隠居をした

その悲しみは、オレには理解出来ない程、深い物であろう。

I世は自嘲気味に笑う。

「お前は笑つか？理想を追い続け、全てを失つたオレを？」

笑える訳がない。守りたいと言って、全てを守ろうとする勇気を、

彼の誇りを笑える訳がなかった。

それに

「貴方は、後悔をしていないんでしょう？」

オレの問いに、力強く頷く。

「ああ。後悔なんてしていないし、オレの行いは………間違いなんかじゃない」

言葉を言い切るその顔には、一点の曇りもなかった。

「だがな、オレはお前が心配なんだ。X世」

その発言に、オレは首を傾げる。

「どついつ事ですか？」

「お前はオレに『似すぎている』。オレと同じ道を歩むかも知れない。だからこそ、オレはお前を呼んだのだ」

「違う……」

オレは、否定しようとしたが、とまってしまった。

。否定出来なかったからだ。余りにも、オレとI世は『似すぎている』

容姿も、戦闘スタイルも、ファミリーも、考え方でさえも

二世は背を向け、話しを続けた。

「もし、お前がオレと同じ道を歩んだとしたら……。見ていられないんだ。再び、ボンゴレが望んでいない姿になるのを。お前が失意の中に沈む姿を……」

二世は振り向き、真っ直ぐオレの瞳を見る。二世の瞳にオレが写る。オレは、二世に対する悲しさと、何か別の感情が入り混じった複雑な表情をしていた。

「それを防ぐ為には、強くなるしかない。今度こそ、全てを助ける事が出来る者になるしかない……」

強さなんて要らない。だけど、守る為には強さが要る。そんなの、オレが一番解っている。そして、守る人が増えれば、更に大きな力が必要だ。

でも、オレに出来るのか？誰よりも強かった、二世にも出来なかった事を

「勿論、これは単なるオレの我が儘だ。無理強いする気は無い。お前が決め」

「やります」

二世が言う終わる前に答えた。

二世になってほしいと言われたからではない。

オレは誰よりもI世に、似すぎている。『みんな』を守りたい。その気持ちは誰よりも理解できる。だからこそ、オレはそれに憧れた。

『みんな』の笑顔を守ることに

「オレは、『正義の味方』になりたい」

オレは、そう強く、ハッキリと答えた。

「……………」

そして、その答えを聞いたI世は

「…フフツ…。ハハハハハハハハ！」

腹を抱えて笑った。

「えーと…なんで？」

シリアスな雰囲気をぶち壊しである。

とは言え、I世がここまで感情を表に出すのは珍しすぎる。めっちゃ

くちやレアな光景を見た気がする。

「フー、フー…。すまない…。余りにも以外な答えであったからな…。」

滲んだ涙を擦りながら答えるI世。

…恥ずかしすぎる、いつそ殺してくれ。

思い返すと、流石に子供っぽかったか…。そう思うと、顔から火が出るくらいに、真っ赤になっているのが解った。

「…流石だな、X世。臆面もなく、答えるとは…。…やっと、気付いた気がするよ。オレは、『正義の味方』になりたかったんだ」

「は、はあ…。」

何故か晴々とした、I世。

オレはどうすれば？

「話しを戻そう、X世」

「は、はい」

流石ツナ。落ちる時もツッコミを忘れなかった。

「武運を祈るぞ…、『綱吉』」

初めて、遠い孫の名前を呟き、落ちるのを確認したI世は、橙色の炎に包まれ消えた

こうして、沢田綱吉は『魔法』の世界に行く事になる

そして、沢田綱吉と魔導士達は出会う事になる

だが、その出会いが、彼等に何をもたらすか、まだ誰も知らない
しかし、彼なら大丈夫だろう

何故なら、彼は、全てを包みこむ大空なのだから

『リリカル×ファイアンマ』、始まります

標的3：初代の意思（後書き）

ミカサ「ザ・アトガキ」

ツナ「と、言ってもやることないんだけどね」

I世「無かったら作れば良い。あきらめるなX世」

ツナ「えっオレですか!?!」

ミカサ「おっ!じゃーさー、京子ちゃんとはどうなったの?それともハルかい?」

ツナ「なんで二人が出てくるんだよ!」

I世「確かに気になるな。もしかしたら、その娘のどちらかが、X I世の母になるかもしれないからな」

ツナ「ちょっ!?!貴方まで何を言っているんですか!?!」

ミカサ「んで、結局どうなったんだよ?」

I世「白状しろ。X世」

ツナ「……………た」

ミカサ「た?」

ツナ「二人共進学校に行っちゃったんだよ!よおー、よおー、よお

「（エコー）」

ミカサ・I世「…すまん」

ツナ「謝らないで！」

ミカサ「うん…。そろそろ終わるっか…」

I世「ああ…」

ツナ「同情すんなー！」

ミカサ「これからも…」

ツナ「スルーするなよ！」

全員「よろしくお願ひしますー！」

標的4：花畑（前書き）

今、僕は部屋でカテナチオを実行しています。
別にカウンターは狙っていないけどね。

標的4：花畑

イギリス某所の山奥、一人の女性が居た。彼女の名はリーゼロッテ（通称ロツテ）。セミロングで、真っ白なキャップを被り、自身の髪色が栄えている。活発そうな雰囲気を感じさせる女性だ。

彼女に明るい雰囲気は無く、表情を曇らして、悩んでいた。もの凄く悩んでいた。

まだ年若い女性が、人里離れた山奥で、立ち尽くしているのはかなり不自然である。

その真相は数時間前まで遡る

ロツテは、双子の姉妹であるリーゼアリア（通称アリア）と、父と仰ぐ初老男性、ギル・グレアムの三人で、イギリスのとある山奥で暮らしている。

人里から離れているが、生活には困らない。基本的に自給自足だし、自然豊かで景色も良い。閉鎖的な都会と違い、伸び伸びとストレスの感じない生活が出来る。

…のだが、やはり生活用品や、調味料などは流石に買わなければな

らない。したがって、時折街に降りて買い物に行く必要がある。

ロツテとアリアが、交代で買いに行くのが日常だった。

そして、ロツテはいつものように、買い物に行ったその帰り道、“それ”は起こった。

山奥とはいえ、しっかりとした道はちゃんとある。道沿いに歩けば、まず迷わない。迷わないのだが…。

「どこ何処ー!?!」

迷ってしまった。

まず状況を確認してみよう。

帰り道、手に持っていたパンを、うっかり落としてしまい、追い掛けて道を外れてしまった。

後は御想像通りである。

追い付いたのは良かったが、気付いたら森の中だった。

完全な迷子だった。

ここで冒頭に繋がるのだ。

「やっぱり、アリアに相談しよっかな…」

正直に言うと、連絡する手段はあるのだが…。

「やっぱりダメー！出来ないって！」

彼女にもプライドがある。仮にアリアに連絡したとしよう。当然父様にも知られてしまう。それはまずい。まずすぎる。

木から木に跳び移る事も出来るが、いくら山奥とは言え、人がいないとも限らないから、これもパス。

事実上打つ手無しだ。

とは言え、いつまでもこんな場所に居るのは良くない。

「はあ…、歩くか…」

あわよくば道に出られるかもしれない。そんな期待を胸に、ロツテは歩み始めた。

しばらく歩くと、ロツテは拓けた場所に出る。

「やったー！知ってるトコに出たー！」

そこは、何度か三人で来た事がある花畑だった。この花畑は街でも隠れた名所であり、一年中花が咲いている美しい場所で、中でも、

花畑の中央にある大樹は樹齢千年は超えるという物だった。

ここまで来れば、もう家まで目と鼻の先だ。

「いやあ、さっすがワタシ！日頃の行いがいいからだね！」

ロツテは意気揚々と、街道に向かおうとした瞬間

「なっ!?!」

ロツテは『何か』に躓き、顔面から地面に倒れてしまった。

「っくく！イッター！イ！何なのよもっ!」

痛む額を摩りながら、涙目になったロツテは、躓いた『何か』を確かめる。

「って、えーーーーーっ!?!?!?」

そこにあっただのは『青年』だった。

その青年は何故か、花の中で寝ていた。

「一応生きてる…よね?」

ロツテは青年の顔を覗きこむ。

顔付きは青年に成りかけといった感じで、17くらいだろう。調度、『あの子達』と同じくらいだ。

そして、ロツテは不思議に思うところが幾つかあった。

彼は日本人であり、彼の服装は、言うところのブレザー。つまり学校の制服だ。日本の学生が何故こんな所で寝ているのか。ツツコミ所が満載である。

それに右手に不自然なまである、多くのリングだ。しかも、その一つ一つが異様なオーラを醸し出している。彼女の野性の本能が、これをただ者では無いと告げている。

「はあ…、しょうがないかな」

荷物が入ったリュックを前にし、青年を背負う。

もう既に日も傾き始めており、このまま青年を放置させていたら確実に危ない。野犬などの野生動物もいる、夜の山は危険だ。

それに、リングのことも気になる。

「うわ…、やっぱりちょっと重いな」

体力には定評があるロツテだが、ちょっと辛そうに呟く。

一見細身に見えるが、やはり男性と言ったところか、以外と体は重く、胸板なども固かった。

「スー…、スー…」

と、不意に、青年の寝息が首筋にかかる。

「にゃっ!?!」

背筋がゾクリとし、ロツテは思わず跳び上がりそうになるが、すんでの所で踏み止まる。

「もうっ、ひゃん!?!」

再び、青年の寝息が首筋にかかった。

起きたら絶対にいじくり倒す。

ロツテはそう心に強く誓うのであった。

と、ここでまた寝息が発動。

「にゃん!?!」

なんだかんだで、家に着くまでこの繰り返しだったのは、御愛敬。

この時、リーゼロツテは知らなかったし、夢にも思わなかっただろ
う

自身の背で眠る青年

この青年が、後に次元世界を揺るがす大事件を解決に導く

『正義の味方』になる事を

まだ、誰も知らなかった

標的4：花畑（後書き）

ミカサ「A・T O・G A・K Iのお時間がやってきましたよ」

ロツテ「いえ〜い！」

ミカサ「今回の登場人物はロツテだけだから、お二人てお送りします」

ロツテ「よろしく〜」

ミカサ「そういえば、ロツテは姉？それとも妹？」

ロツテ「何いきなり？」

ミカサ「いやあ、調べただけで間に合わなくてさ、今回はぐらかしたんだよね」

ロツテ「さあ？最近ほかの小説にも出てないし、忘れちゃったよ」

ミカサ「はい、そこ、メタ発言禁止」

ロツテ「まあ、双子だからそんなに意識してないよ。どっちかというと仲の良い友達って感じだもん」

ミカサ「…いいな。オレなんて次男だもん。上からと下からの圧力ハンパないもん。今日だつて、ちよつと、上から物借りたらマジギレだぜ。おかけで部屋でカテナチオだよ。いつかカウンターしかけたいけど、そんなチャンス無いからな。そんな」

ロツテ「ありゃ、変な地雷踏んだかな？まあいいや。これからも、ワタシ達を…」

全員「よろしくお願いします!!」

ミカサ「よかったら、ロツテかアリア、どっちが姉か教えてください!!」

標的5：ツナの本質（前書き）

ドラブグースの面白さに脱帽

標的5：ツナの素質

どこだ…、どこにいる…

深い森の中、沢田綱吉は目を閉じ、極限まで集中する。

五感の一つである視覚を捨て、他の感覚を高めるのだ。

その為ツナの耳には、常人のそれを超え、世界の声が聞こえる。

森のざわめき

動物達の足音

そして

『敵』の呼吸すらも

「っ！」

ツナの背後から、数発の光弾が迫る。

『主！後ろです！』

「解ってるよ“レグルス”！」

左手を覆うグローブ型のデバイス、『レグルス』に言われる前に、身を翻し光弾が当たる寸前で避けきった。

『旦那！行きますよ！』

「うん！“レオーネ”！」

体制を素早く整え、レグルスと対になるデバイス、『レオーネ』を森に向ける。

「フレイム……………ショット！」

『Flame Shot!』

レオーネのバングル部、リボルバーの排莖口から空弾が飛び出し、ツナは橙色の砲撃を放つ。

煌めく光が、森を薙ぎ倒し、敵が居た地点を飲み込む。

「やった…のかな？」

警戒心を解かず、煙が立ち込める先を見据える。

「うん。今のは良い感じだったよ」

煙の中からそんな声が聞こえる。

「ありがとう、アリア」

ツナは煙の中から出て来た女性、リーゼアリアに手を伸ばした。

それから3時間弱、オレ達二人は修行を続け、日が傾き始めた頃に帰路に着いた。

「いっつつ…。アリアって、全然手加減しないんだから、もう体中が傷むよ」

ツナは少しズキズキとする右肩を摩りながら愚痴を言う。

ツナの体の所々に、包帯や絆創膏が貼られていた。アリアが治療してくれた物だ。

「そんな事言っただって、ツナ君どんどん強くなってるから、手加減したらこっちがやられちゃうもの」

と、アリアは困った様子で、微笑みながら言った。

「買い被りすぎじゃないかな？」

アリアの言うことを、全く信じていない様子で頭を掻くツナ。

『そんなことは無いです、主。魔法を始めて一週間でここまで我々を使いこなすなんて、凄い事ですよ』

ツナは一週間前にこちらの世界にやって来て、体術をロツテ、魔術をアリア、基本的な知識をグレアムから教わっていた。

そこでツナは自身の『才能』を開花させていたのだが、彼自身は全く気付いていなかった。

レグルスがそう言うってくれるのは嬉しいけど、何か実感がわかないんだよな。

そこにレオーネが加わる。

『旦那、自分の凄さを解って無いみたいだから言いますが、魔法初心者で魔法ランク“AAA”は異常ですから』

魔法を始めたばかり人間が、いきなりAAAランクをたたき出すなんて、それは天才と呼ばれる人種と言っても過言ではない。ないのだが…。

「ふーん…。そうなの？」

正直、死ぬ気の炎より出力が出ないから、基準が解りずらいし、今まで何をやってもダメツナだったから、いきなり才能があると言われてもピンとこない。

それが、ツナの本音であった。

(もう少し自分に自信をもっても良いんだけど…)

心の中で溜息を履くアリア。

実際、魔法の師匠であるアリアの目から見ても、ツナの成長は著しかった。

複数のデバイスを使う魔導士や騎士は、決して珍しくは無いが、ここまで極端な使用者はそういないだろう。

戦闘特化のベルカ式デバイス『レオーネ』

補助特化のミッド式デバイス『レグルス』

使用者は普通、ミッド式かベルカ式の、どちらか片方のみ使用するのが一般的だ。その両方を使いこなすのは、普通に複数のデバイスを使うより、遥かに難しい事だ。それを使いこなすツナの非凡さは解るが、それと理由はもう一つあった。

それは、ツナの使用できる魔法である。

ツナには空域戦闘の素質がズバ抜けていた。例え素質があつたとしても飛べるようになるのは時間がかかる。だがツナは練習を開始した瞬間に飛べた。

まるで『最初から飛ぶ方法を知っていた』ように

空を飛ぶ事に関しては、ツナは天才だった。初めて飛んだ時には、既にトップレベルだった。『管理局』でも、彼を超える者はそうは居ないだろう。

しかし、ツナにあったのはここまでだった。

他の魔法は壊滅的に駄目だったのだ。

素質があつたのは直射型の砲撃、基本の魔力付加、肉体強化のインクリースタイプの三つだけ。

したがって、ツナの戦闘スタイルはインクリースタイプで肉体を強化し、状況に合わせて近・中の距離で戦う事である。

グレアム曰く『空中戦に特化した魔導騎士』らしい。

それは、体術を担当しているロツテも同意見だった。

空中での戦闘は勿論、肉弾戦も高レベルだった。

攻撃をいなし、避ける。

防御力が低いスピードがある者の、基本的なスタイルだが、ツナのそれは違った。シンプルなこのスタイルを極め、全ての攻撃を捌き、一瞬の隙を見逃さずに貫く。ロツテでさえ、今まで修行中でクリンヒットがなかった。

尚且つ、ツナには一対一の白兵戦や、一対多数の集団戦、空中戦などの、全ての戦闘で戦いの流れが見えていた。

流れを見れると言うことは、確実に流れをこっちに持ってこれると同意だ。そのような戦力は貴重だ。

と、ロツテはツナを高く評価していた。

それは勿論私も同じだけれども…

「はあ…」

「どうしたのARIA？さっきから溜息ばかりかして？」

「…何でもない」

貴方のせいですよ。なんて言えない。彼は優秀な魔導騎士になるだろう。それもエースクラスまで到達する逸材だ。なのだが…、些か自分の器を理解出来ていない気がする…。

「はあ…」

今日何度目かの溜息をつく。

と、そこで家が見えてきた。煙突から煙が出て来て、家の明かりが優しく迎えてくれる。

今日も無事に大変な一日が終わった

訳がなかった。この後ツナは、ロツテにいじくり倒されるのだが、彼は知るよしもなかった。

標的5：ツナの素質（後書き）

ミカサ「アト・アトアトガッキ・アトガッキ！」

アリア「解りずらいですよ…。」

ミカサ「シャラップメスネコ！」

アリア「えっ！なんでですか！？」

ミカサ「おめーらの歳わかりずれえんだよ！お母さんタイプにするか、同級生タイプにするか迷ったんだよ！めっさ迷ったんだよ！（大事な事なので二回言いました）」

アリア「私に言われも困ります！使い魔だからしかたないじゃないですか！」

ミカサ「お前達をヒロインにするのか、否か迷ったんだよ！」

アリア「……………え？」

ミカサ「オレの予定では、ツナはどこぞの幻想殺しよろしく建築士に成る予定です。そこに乗るか乗らないか迷ったのでさあ」

アリア「じゃ、じゃあ私もヒロインになれる可能性が…？」

ミカサ「無きにしもあらず。まあ気長に待てや。そんじゃ、これからもオレ達を…。」

全員「よろしくお願いしますー！」

ツナ「…オレの出番は？」

プロフィール：その1（前書き）

時々、プロフィールを載せます

プロフィール：その1

【沢田綱吉】

年齢：現在17歳

所属：ボンゴレファミリー

魔力ランク：AAA（これから上がる可能性あり）

クラス：魔導騎士

【人物像】

この物語の主人公。設定は継承式偏から約3年後の姿であり、現在高校3年生。性格は昔と変わらず、心優しく、仲間思いである。顔立ちは成長したこともあり、I世に似てきて、裏では密かにモテているのだが、当の本人は全く気付いていない。京子への恋心は疎遠になった為、昔程ではなくなった。なお、本編では平行世界の『地球』で隠居中のグレアムに、自分の状況をかい摘まんで説明した後、彼に弟子入りし、現在修行中の身である。

使用デバイス

【シリーズ・ライオンハート】

・レグルス「ミッドチルダ式」

・レオーネ「古代ベルカ式」

ボンゴレI世から譲り受けたグローブ型のデバイス。二つ合わせた総称をライオンハートと呼ぶ。待機状態は獅子の装飾が施されたリングの形状である。二つのデバイスの性能は両極端で、攻撃特化のレオーネ、補助特化のレグルスで役割を分担している。違いはあれど、どちらも共通して、魔力を放出する機能がついて、飛行時にも応用出来る。だが、ツナはまだ全ての機能を使いきってはおらず、これからのツナの成長が鍵となる。

【レグルス】

攻撃機能を捨て、サポートに特化させたミッド式のインテリジェントデバイス。形状は基本的にノーマルXグロブと同じだが、基本カラーは深紅で、バングル部は炎の装飾が施されている。そして最大の違いはコアクリスタルの部分が雌獅子となっている。唯一使える魔法はインクリースタイプの身体強化のみだが、その分ジャミング、演算能力や感知能力などのサポート能力が優れ、他の追隨を許さない。なお、搭載されたAIだが、礼儀正しい女性のようなタイプらしい。

【レオーネ】

サポート能力こそ無いが、その分戦闘では、その能力を遺憾無く発揮するアームドデバイス。形状はほぼレグルスと同じで、バングル部に、リボルバータイプのカートリッジ機能を搭載している。なお、最大装填数は6発。古代ベルカ式といっても、I世が施した特殊カスタマイズ仕様と、レグルスの補助で、体への負担を8割型軽減することに成功。使用魔法は直射型の砲撃及び、ベルカ式の基本の魔力付加の二つだが、ツナにとって、それだけでも充分であった。こちらはレグルスと違って、軽い性格な男性タイプのAIのようだ。

【魔導騎士】

ツナの魔法使いとしての名称。ミッド式、ベルカ式の両方を使う者を指す。魔力ランクはAAAで、これは魔法に初めてふれたとしては破格の量であった。これは、時空管理局の『エース・オブ・エース』が初めて魔法に触れた時と同等である。グレラム曰く、『空中戦に特化した魔導騎士』らしく、その名の通りに、空中戦は初心者どころが、熟練のそれを遥かに超える実力を見せる。しかし、他の魔法は壊滅的だった。それを補う為、現在奥の手を習得中である。

プロフィール：その1（後書き）

ミカサ「うん。特にないな」

レグルス「はい、番外編ですからね」

レオーネ「やる事ないからどうすんの？」

ミカサ「そんじゃ、暇潰しで質問コーナーでもするか。君達がリボンキャラで一番好きなシーンとキャラは何？」

レオーネ「はい！はい！はい！」

ミカサ「速いなレオーネ。そんじゃあ、はいどうぞ」

レオーネ「好きなキャラはクロームちゃん！好きシーンはラル姐さんの水浴びと、ブルーベルの初登場！」

ミカサ「……………」

ミカサはレオーネをむんずと掴んで遙か彼方にぶん投げた、とミカサは一仕事した達成感に包まれる。

レグルス「全く馬鹿は困りますね。次は私ですね」

ミカサ「お、おう。レグルスなら大丈夫」

レグルス「好きなシーンは主のパンツ姿。好きなキャラクターは主。寧ろ主以外は要りません。邪魔です。鬱陶しいです。主が照れたり、

涙目になったりしたら悶絶物です。ハイパー死ぬ気モードの主に見詰められたら興奮し過ぎてショートしてしまいます。主の右指にいる時は至高の極みです。天国です。もう死んでも悔いなんてありません。主のお嫁さんになりたいくらいです。主が破壊しろと言うなら、世界でも破壊します！主が』

ミカサ「レグルス！お前もか！」

ミカサはレグルスを掴み、再び遙か彼方にぶん投げた、とミカサは息を切らせて膝をがつくりと折る。

ミカサ「なんでこうなった…。出て来るのは変態ばかりじゃないか…」

ミカサは大袈裟に天を仰ぎ、ミカサは叫ぶ。

ミカサ「スバルー！早く出て来てくれー！」

ミカサは天まで届きそうな勢いで叫ぶが、スバルが出るのはまだ先ということ、ミカサは知るよしもなかった。

ミカサ「ちつくしよー！これからも俺達を…！」

全員「よろしくお願いします…！」

標的6：漢（前書き）

最初に言わせてもらいます。

ツナだって健全な高校生です。

女の子に興味があるのはしょうがない事です。

皆さんだってあるでしょう。人には言えない性癖が。

そんな彼を責める事は誰にも出来ないのです。

つまり、何が言いたいのかと言つと。

ごめんなさい！悪ノリしすぎました！

標的6：漢

ロツテがああ青年、沢田綱吉君を連れてきて早いもので、もう三週間が経った。

最初、ロツテが綱吉君を連れてきた時、アリアは勿論、この私、ギル・グレアムも驚いた。何せこの遠く離れた異国の辺鄙な山奥に、日本人の青年が来るとは夢にも思わなかったからだ。

ロツテ曰く、『始まりの花園』で気を失っていたらしく、あのままだと危険な為連れてきたという。

一先ず彼を寢室のベッドに寝かす。その後、アリアは彼の容態を調べてみると、幸いにもただの疲労だったらしい。私達は胸を撫で下ろす。

そこでロツテは私に質問をしてきた。

「…彼の指輪、何か変な感じがするの。父様、調べてくれませんか？」

そう言われて、私は彼の右手に視線を傾けた。

「むっ…、これは…」

ロツテの言い通り、彼の右手には四つのリングが嵌められていた。

鎖で繋がれた、大小二つのリング

左右対称の獅子の模様が施された二つのリング

後者は、恐らく待機状態のデバイスだろう。しかし、年代が特定出来ない程、かなり古いタイプの物だ。手入れが行き渡っているのか、かなり良好な状態であった。

問題は前者だ。これを見た瞬間、心臓がわしづかみされるような感覚に陥った。長年の直感から言うと恐らくこれは『ロスト・ギア』。しかも、とてつもない力を秘めた物だった。一個人が所持して良い物では無い程のレベルだ。

これはまずいな…

私はこのリングの正体を確かめようと、リングに腕を伸ばそうとするが…。

止めた。

昔の癖で、有無言わず相手から物を取ろうとするが、私はもう管理局の人間では無い。勝手に物を取る権利はもう無いし、する気もなかった。

「…彼が起きるまで待とう。話しはそれからゆっくりとしよう」

そう言うと、彼に背を向けて寝室から出る。遅れて娘達はその後を追った。

自分はもう管理局の人間では無い。なのにその時の事が忘れられない。

そんな自己嫌悪に陥るが、強引に胸の奥に押し込んだ。

それから一時間後、三人はリビングで紅茶を飲んでいると扉が開く。彼が起きて来たのだ。

私は彼に向かってニッコリと微笑む。

「おはよう。調子はどうだい？」

すると彼は、怖ず怖ずと頭を下げる。

「は、はい。平気…です」

「なら良かった。君があんな所で寝ていたから、ここで看病していたんだ」

「あ、ありがとうございます！」

「いや、私にではなく、彼女達に礼を言いなさい。ここまで運んできたのも、君を看病したのも、みんな彼女達なんだ」

「わかりました」

彼はロツテ達の方を向くが、何故か固まった。

「ん？どうしたの？」

ロツテが問うと、掠れた声で喋った。

「ね……」

「「ね？」

「ね……」

「どうしたのかね？」

私の問いに反応した彼は私に振り向くと、何故か大号泣していた。
そして

「ネ・コ・ミ・ミ・ミ・だあああああ——————————！！
！！！！！！！！！！」

彼は天まで届く凄い勢いで叫んだ。

三人は知るよしも無かったが、彼は……その……『獣耳フェチ』だった

…。彼は獣耳に目が無かったのだ。

「あつ！」

「しまった！」

彼の魂の叫びに呆気にとられていたら、不意に慌てだし、二人は咄嗟に近くにあつた帽子を被ろうとした瞬間。

「させるか！」

彼はもの凄い速さで二人の帽子を弾き飛ばした。

「!?!」

「速い！」

二人は勿論、数々の死闘を乗り越えてきた私でさえ目が追い付かなかった。これは、管理局の『金色の死神』にも匹敵するかもしれない速さだった。

そんな私達の心境も知らず、彼は言い放つ。

「折角リアルネコミミを見ることが出来たんだ！それなのに…帽子で隠すなんて…どうかしてるぜっ！リアルネコミミを目の前に見えないなんて…死んでも死に切れねえ！」

そう言い切る彼は、ある意味男らしい。

じわりじわりと、彼はロツテ達に近付いて行く。そんな彼の姿は、誰がどう見ても変質者そのものだった。

「寄るな変質者！」

余りの気持ち悪さに耐え兼ねたロツテは、右ストレートを繰り出す。常人では絶対に交わすことが出来ない程のスピードだった。だが彼にはそんな物は効かない。

「甘い！」

驚異的な反射でいともたやすく避け、突き出された右手首と、空いていた左手首を掴んだ。

「ちよっ！なにすんのよ！」

凄い力を取り押さえられ、身動きの取れないロツテ。そして彼は、ロツテに顔を近付ける。

「ああ…。本当に可愛らしい…。この世の物とは思えない程の美しさだ…」

「にゃ！？」

彼の突然の発言に戸惑うロツテ。顔が真っ赤なのは言うまでもない。しかも彼は美形だ。良い男にこのような言葉を言われたらひとままりも無いだろう。

「お前を、オレだけの物にしたい」

まさにトドメの一撃だった。

ピンク色の何かによって吹っ飛び、ロツテは堕ちた。

何に堕ちたって？それは言うまでも無い。

ガクンと、ロツテは体制を崩す。それと、彼は慌てて受け止める。

「大丈夫か？」

「…平気よ！」

ロツテは彼の手を払いのけ、ぷいっと、体ごと顔を背ける。（態度とは裏腹に、顔を真っ赤にし、にやけていた）

と、そこで今度はアリアにロツクオン。今の出来事を呆然と見ていたアリアを捕まえるのは容易なことだった。

「ちよっ！止め」

「貴女も負けず劣らず美しい…」

「はう！」

彼の魔法の弾丸は、アリアの心を蜂の巣にする。

「先程の彼女を太陽と例えるなら、貴女は月だ。静かに闇を照らす、神秘の光（ネコミミ）だ…」

「あ…う…」

彼はアリアの手を強く握る。それと比例して、彼女の鼓動が高まるのを感じた。

そしてやはりトドメの一撃。

「全てを敵に回しても、君を手に入れたい」

アリアも堕ちた。彼の弾丸にはなすすべもなく墮とされた。

「私…、貴方なら…」

「ん？」

瞬間、アリアが言い終わる前に、彼は何か黒い物体に強打された。

「娘は誰にもやらん！」

殴った当人、グレアムはフライパンを持ってタバコをくわえ、仁王立ちしていた。

その姿は妙にハードボイルドだったのは突っ込んではいけない。

「つまり君は、するつもりは無かったというのかね？」

「はい……」

私は彼を縄で締め、正座させて尋問していた。因みに娘達は他の部屋に行かせた。…これ以上一緒にさせると危険だと判断したからだ。

「娘達をたぶらかして、する気が無いと言っのかね」

「……………」

彼は俯き、押し黙る。

「…答えないということは、肯定とみなしよ」

「…否定はしない」

バギィ！と、音を立ててフライパンが割れた。…人間の握力じゃないな。

無言の笑顔が彼を精神的に追い詰めていく。

「でも！僕は彼女達を愛しているんです！この気持ちは嘘偽りはあ

りません！」

扉の向こうから、ガタツと何か動く。私はそれに向かってタバコの箱を投げると、タバコの箱は何故か曝散。扉の向こうにいた影は急いで何処かに行った。

「さあ、お話し（お仕置き）をつづけようか」

「今お仕置きって言いましたよね！」

「さあ！お前の罪を数えろ！」

「ぎゃあああああ！！！！」

因みに、お話しは夜が明けるまで続いたとさ

標的6：漢（後書き）

グレアム「何か言う事は？」

真つ暗闇な部屋に、ミカサとツナが鎖に繋がれている。

ツナ「オレは無実だ！全てミカサが悪いんだよ！」

ミカサ「なっ！？お前仲間を裏切るのか！！」

ツナ「設定を考えたのはお前だろ！」

ミカサ「うるせえムツツリ！京子ちゃんのパンツ見ただけで鼻血出すような奴だからそういう設定が思い付いたんだよ！」

ツナ「なっ！？そういうあんただってロリコンじゃないか！普通のキャラ見ているより、ロリキャラを見ているほうが良いって言うってたじゃんか！」

ミカサ「貴様！俺がガチで悩んでいた事を暴露すんじゃ」

ドン！（壁を叩き割る音）

グレアム「何か言うことは？」

ツナ・ミカサ「すみません…」

グレアム「よろしい。でもまだまだお話ししたりないなあ」

ツナ・ミカサ「ヒイイー!!」

グレアム「それじゃあー先ず終わって、ゆっくりと殺るっか」

ツナ・ミカサ「ちよっ待っ」

グレアム「これからも……」

全員「よろしいお願いしますー!!」

ツナ・ミカサ「いやあああああー!!」

少し離れた所から……

レグルス『くっ……。 “封印” さえ解ければ主に』

レオーネ『ネタバレ禁止!』

標的7：真つ直ぐで、綺麗な（前書き）

すいません。グラムさんに独自の解釈を入れました。

見たことあるかも知れませんが、ご了承ください。

標的7：真っ直ぐで、綺麗な

「…では、これでお話しを終えるところでしょうか」

「……………はい」

グレアムさんのお仕お じゃない、お話しが終わった。

結論から言うと、リーゼアリアさんとリーゼロツテさんが常に帽子を被る事で決着がついた。…実に勿体ない。実に勿体ない。（大事な事なので二回言いました）

確かにオレが悪かったけど、夜が明けてるのは洒落にならない…。おかげでオレの体ボロボロだ。

断言しよう。この人はただの親バカではない。凄い親バカだ。

「何か失礼な事を考えていないかね？」

「い、いえ！何も！」

くっ！この人はオレの思考までよめるのか！？

「君は顔にすぐ出るからね。邪まな事を考えているとすぐに解るよ」

「気をつけます…」

オレは無力感を味わい、完全な敗北を悟った

「それでは、本題に入るとしよう」

そうやってグレアムさんは、雰囲気を変える。今までの空気は消え失せ、部屋に緊張感に包まれた。

グレアムさんは恐らく、様々な死線を乗り越えた歴戦の猛者だ。その風格が物語っている。

こういう人は、一挙手一投足を見逃さないし、隙あらば確実に貫く。慎重に越したことはない。

「何ですか？」

オレはゆっくりと口を開く。

「君のそのリングについて聞きたい」

やっぱり。というのが正直な感想だった。でもこれなら答えるのは簡単だ。

「貰ったんです」

正直に言う。それがこの手のタイプの一番の攻略法だ。

「ほう。誰からかね？」

「ボクの父です。ちょっと変わった物を一杯持っているんで」

あながち間違いじゃない。【ライオンハート】は元々父さんの物だったし、【ボンゴレギア】は父さんに選ばれたからここにある。

「そうか……。ならば、そのリングの意味をちゃんと理解しているかね？」

オレはその問いに頷く。

【ライオンハート】の力は落ちてる最中に大まかに聞いたし、【ボンゴレギア】はオレ専用の武器だ。長年共に戦ってきたから、知りすぎている位だ。

それに、この力をどのように使いたいか、もう『覚悟』は出来ている。

「ボクはこの力を、困っている全ての人の為に使いたいです」

「……………」

オレの答えを聞いたグレアムさんは、目を閉じる。何かを考えてい

るようだ。それから四、五分後、グレアムさんは重たい口を開いた

「ボクはこの力を、困っている全ての人達の為に使いたいんです」
余りにも、真っ直ぐな答えだった。

最初は、綱吉君の人となりを見た後、彼の素性を聞いて、局に引き渡すつもりだったが、それをする気はなくなってしまった。

余りにも、綺麗な答えだったからだ。

かつて、魔法に出会った頃の私と同じだった。

『この力で、大切な人達を護る』

そう理想に燃えていた。

しかし、やがて大切な部下の死で気付く事になる。この矛盾だらけ

の世界で、それを通す事は不可能だ。理想はあくまで理想にすぎないのだと。

それからの私は酷かった

百の人間を救う為に、一の人間を切り捨てる。

客観的に見ると、それは正しい選択だったかもしれない。

だが確実に、救えなかった命が在った。

何度も、何度も、何度も

正義だと自らを偽り、少なからずの犠牲を出し続けた。

数多くの人間を救い、地位も得た。

だが、それは尊い犠牲の上で得た物だった。

私には常に後悔しかなかった。

救えなかった人達に対する自責の念に捕われていた。

そんな闇の中にいた私を救ってくれたのは、三人の少女だった。

星空の光のように、煌めく美しい優しさを持つ少女

激しく轟く雷光のような意思を持つ少女

そして、例え闇の中にいようと、全てを包み込む夜天の少女

彼女達が闇の中にいた私に手をさし伸ばしてくれた。私を救ってくれた。

だからこそ、理想を彼女達に託し、一線から外れる事が出来たのだ。

そして今、私の目の前にいる少年も同じだ。

彼女達と同じ目をしている。例え、どんな困難が待ち受けていたとしても、決して失う事のない光。

ならば、もう答えは出ているのではないか

「綱吉君……。私の弟子になる気はないかい？」

標的7：真っ直ぐで、綺麗な（後書き）

ミカサ「死ぬ気の炎」

ツナ「お！？おーおー…うーん…あつ！大山らっじー！」

ミカサ「じ…ねえ…シヨット。』と』だぜ。』と』と』」

ツナ「と…ドクターシヤマル」

ミカサ「おいおい。ドクターは無えだろうが」

ツナ「公式ファンブックでそう書かれてたからOK」

ミカサ「なっ！？せけえーな…。』る』か…。ルツチード・チエー
リ」

ツナ「り？り…り…』り』って、これ以上在ったけか…」

ミカサ「5秒前」

ツナ「ちよっ！待って！」

ミカサ「4」

ツナ「り！り！り！」

ミカサ「3」

ツナ「出てこい！オレの中の『り』！」

ミカサ「2」

ツナ「あっー！」

ミカサ「1」

ツナ「リボーン！」

ミカサ「『ん』じゃん」

ツナ「……………」

ミカサ「罰ゲームは…、好きな娘に、自分の性癖を暴露する…か。えげつないな」

ツナ「なっ！？そんな酷いことなの！？」

ミカサ「さあてと…。言ってもらおうか」

ツナ「くっ、人で無し！」

ミカサ「なんとも言うが良い。では早速」

ガララ（扉の開く音）

グレアム「すまない。少し用事があったから遅れてしまった」

ツナ「ナイスタイミングです！」

ミカサ「ちっ」

グレアム「どういう事だい？」

ツナ「何でもありません！では速く終わらしましょう！（ミカサが暴走しないうちに）」

グレアム「来たばかりなのだが…」

ツナ「これからも…」

全員「よろしくお願いします！！」

標的 8 : 選択 (前書き)

書いていてツナをもぎ取りたくなつた

標的 8：選択

一刃の風が空を駆けぬける

風の正体、沢田綱吉は猛スピードで急降下し、師匠の一人、リーゼロッテに拳を振るう。

「はあっ！」

「甘いよ、ツナ」

ロツテは猫のような身のこなしで、ツナの攻撃をかわした。

「なっ!?!」

一瞬、怯んだ瞬間を狙い撃つかのように、三発の光弾がツナを襲う。

ズガガガン!

「くっ…! そっ！」

全弾がツナに命中し、爆煙がツナの体を包み込んだ。

「今日も私達の勝ちみたいですね、ツナ君」

シユタつと、木から着地するリーゼアリアは、ロツテとハイタッチをする。

「魔法を始めて、『二年』のルーキーに負けられないもんね」

「うん。さあ、ツナ君を助けに」

「まだ終わってないよ！」

「えっ!?!」

ツナは爆煙を切り裂くと、レグルスを後方に向け、レオーネをロツテ達に向ける。

「いくぞ！オペレーションCROSS！」

「行きますよ、旦那！」

『了解しました、我が主！』

ツナのトリガーボイスで、攻撃のスイッチを切り替えるレグルスとレオーネ。

『ターゲットロックオン！』

『カートリッジ全弾解放！』

『魔力放出200%！』

『発射スタンバイ！』

「うおおおおおー!」

イメージするは、長年オレを助けてくれた最強の一撃。

「CROSS…BANNER!!」

『Cross・Banner!』

「えっ!？」

「これは…反則です…」

気付いた時には既に遅し。圧倒的な魔力の砲撃の前に、二人は立ち尽くすしかできなかった。

膨大な魔力の波が、ロットテ達を飲み込んだ

オレ達は修行を終えて帰路を歩いていた。

「いやあー。遂に負けちゃったねー」

あはは、とあっけらかんとロットテは笑った。どうやら敗戦の事はそれ程気にしていないようだ。

「それにしても、どうしてカートリッジを使えたんですか? 『全弾使っていた』のに?」

オレはロツテの問いに答える。

「ああ、あれね。あれは『魔力の零地点突破』だよ」

「零地点…?」

「うん。魔力の零地点突破ってマイナスの境地で、魔力を中和するんだよ」

「うーん…」

「つまり…、どういう事ですか?」

言葉で説明しても、二人はどうやらピンと来ないようだ。

「簡単に言うと、魔力を吸収して自分の力に出来るんだよ。レオーネには、空のカートリッジを創れる仕様になっていて、魔力を補充出来るんだ」

「……………」

あれ、二人とも何で変な顔をしてるんだ?

「すっ……………うーい!」

「何て物を生み出してるんですか!」

凄じ剣幕で詰め寄ってくる二人。えーと…何で?

「いいですかツナ君！魔力吸収って物凄いレアなんです！それを貴方は簡単にやってのけるなんて前代未聞なんですよ！」

「簡単じゃないけどね……」

オリジナルをベースにしたといっても、死ぬ気の炎とは勝手が違うから、習得に二年もかかったし。それに……

「オレはダメツナだからさ……。負けない為には、自分に出来る事を考えるしか無いんだよ」

これまでの戦いでもそうだ。自分の全てをぶつけてやっと勝てたのが常だった。自分が強いなんて、考えた事は一度も無かった。

「……はあく、出たよツナのネガティブ癖」

「もうちょっとと自信を持ってもいいのに……」

二人は呆れた感じで深い溜息を吐いた。

そんなこんなで、家までもう少しだった

帰宅した後、三人は軽くシャワーを浴びて（シャワーを浴びている最中に、ロツテ達が乱入してきたのはいつもの事だ）夕食の席に着く。

「いやあ、ツナが魔力を吸収してきたびっくりしたよー」

「うん。それに、最後のも凄かったよ。魔力補助も無しにあんな砲撃を放つなんて思わなかったよ」

「いやあ…」

あはは、と照れた調子のツナ。

今回の初勝利で夕食の会話に花を咲かしていた。

それをグレアムは、優しく微笑んで参加していたが、不意に顔を陰しくする。

「どうしたんですかグレアムさん？」

ツナは僅かな変化を見逃さなかった。『超直感』は伊達じゃないということがある。

「いや…何、綱吉君に少し大事な話があっただけ」

「大事な話ですか？また、この前みたいな無理な修行は嫌ですよ」

「…まずはこれを見てくれないか？」

グレアムは懐から、一枚の封筒を取り出し、オレにそれを手渡す。

「えーと…『時空管理局』？」

封筒の中に入っていたのは、一冊のパンフレットだった。

時空管理局の名前は知っていた。いくつもの世界を管理している法の番人。そして、かつてグレアムさんがそこに所属していたことを。

何んでこれをオレに？

「綱吉君…。局に行く気は無いかい？」

「えっ？」

オレが…管理局に？突然の申し出にオレはキョトンとしてしまう。

「お父様！？」

「何故ですか！？」

と、ロツテとアリアは机を叩いて立ち上がる。勢いよく立ち上がったために、椅子が倒れてしまった。

グレアムは険しい表情のまま、二人に訳を説明する。

「ロツテ、アリア…。それはね、綱吉君が私達の想像を遥かに超えてしまったからだよ」

「なっ！？」

「えっ!？」

「どういう事ですか!？」

上から、オレ、ロツテ、アリアの順で驚きの声を上げる。

グレアムは話しを続けた。

「私達が彼に教えられるのは、あくまで『理論』と『少数数での戦闘』だけなんだ。そして今日、綱吉君は訓練とはいえ、お前達を降した…。雛鳥はいつか巣から飛び立つ。それが…、今なのだよ」

それでも納得していないロツテ達をよそに、グレアムはオレに問う。

「君はどうしたいかね、綱吉君?ここに残るもいい。管理局に行き、他の魔導師達と切磋琢磨するもいい。だけど、これだけは分かってほしい。本来、君は『ここにいない人間』、言ってしまうえばイレギユラーみたいな存在だ。君の選択次第で、他者の運命が大きく変わってしまう可能性だってある」

…実は、グレアムさん達にはオレの秘密を教えている。これから一緒に暮らすのだから、最低限の事は隠したくない。そう思ったからだ。

そこで沈黙の掟オメルタに引つ掛からないほどの事を伝えた

この世界に来ることになった経緯

ボンゴレの事を

オレがマフィアのボスであることを

最初、それを聞いたグレラムさん達は言葉を失ったが、暖かく向かえてくれた。

そればかりか、自分達が起こしてしまった『罪』を語ってくれたのだ…

話しを戻そう。グレラムさんが言うには、『平行世界』から来た人間、つまりオレがこの世界に関与すると、何か問題が生じるかもしれない。との事だ。

かつて死闘を繰り広げた、あの『悪魔』が、平行世界からもう一人の自分を連れて来ようとして、その世界が消滅してしまった事がそれをより物語っている。

その事を知っているから、断るという選択肢がある。

それでも、オレは

「…オレは、管理局に行きたい」

前に進む事を選んだ。

強くなりたい。『みんな』を守る強さが欲しい。なら、オレはどんな困難が待ち受けていようとも、前に進み続ける。

それが

オレの

『覚悟』だから

「…やはり、そう言うと思ったよ。すぐに向こうに連絡を入れるが、数日位かかるからゆっくり準備をするといい」

そう言い終わると、グレアムは半ば魂が抜けかかっている二人を連れて、自室に戻って行った。

ジーンっとジッパーが閉まる音がオレの部屋に響く。

まだ時間はあるが、速く準備するにこしたことは無いだろう。

無論、ベッドの下の男の聖書もバックの最下層に仕舞ってある。

（前ロッテ達に見付かった時、それは燃やされ、自分も燃やされたが、集めるのは止めなかった。理由？愚問だ。漢だからさ）

そんなこんなでオレはゴミ袋を脇に置いた。

「ふうー、大分片付いたな……」

部屋を見渡すと、綺麗に整頓されていた。

ツナは掃除は余りしない。向こうに居た時から自分の部屋は汚かった。

それを良く言う『生活感が溢れる部屋』と言うべきか、今の部屋は些か寂しかった。

色々あったからなー

と、オレは目を閉じて、今日までの思い出に浸った。

グレアムさんの超理論的な授業

ロッテの超感覚的な授業

アリアの超冷酷な授業

普通の人は死んでたよ

前の弟子だった…えーと…

真っ黒くろすけ？さんに同情してしまった

どこで手に入れたんだろうか

ロッテ達が毎日スク水で風呂場に乱入

ロッテ達が毎朝メイド服でオレを起こす

時々、朝目覚めると、裸Yシャツで一緒に寝ている事もあった

でもね二人共

その度に、グレアムさんがオレを殺そうとしてくるんだよ

正直、オレの理性は限界だった…

ネコミミエ…

良く考えると、凄い二年間だったかもしれない。

気が付くと、オレの頬に一筋の涙がたった…

コンコン

そろそろ寝ようとした時、不意にノックの音が響く。

誰だろ、こんな時間に…？

時計を見ると、もう十二時を過ぎていた。

欠伸交じりで扉を開けると、そこにはロツテとアリアが立っていた

標的 8：選択（後書き）

ミカサ「以上、ツナをもぎ取りたくなる話でした」

グレアム「まったくだ」

ミカサ「でも、ツナならいいんじゃないですか？」

グレアム「何が？」

ミカサ「惚けないでください」

グレアム「まあ…、一万歩譲って…かな」

ミカサ「…一杯飲みませんか？奢りますよ」

グレアム「悪いね。…甘えるところかな…」

ミカサ「それじゃあ行きま」

ツナ「ちょっと！なんでいつもシャワー中に来るんだよ！」

ロツテ「ぐふふっよいではないか」

アリア「さあ隅々まで洗ってあげすよ」

ツナ「アッー！ー！」

ミカサ「GO！」

グレアム「任せたまえ！」

ミカサ「ツナが死○ことを祈って、今回はこれにて終幕。これからオレ達を……」

全員「よろしく願いします……！」

ツナ「不幸だ……っ……！」

標的9：月夜の告白（前書き）

少し遅れてすみません。

いまさらですけど、ツナノ服装は継承式編の時ので、バリアジャケ
ットは、零の軌跡のロイド・バニングスの服（細部にXやボンゴレ
の紋章が刻まれています）です。

標的9：月夜の告白

満月に照らされる『始まりの花園』

月の光が辺り一面の花畑を照らし、それはどんな芸術品にも劣らない程の美しさであった。

なかでも中央の大樹は、まるでお伽話に出てくるような、神秘的な輝きを放ち、この世の物とは思えない程の光景であった。

その大樹の下に、三つの人影があった

「スゲー！。こんなに綺麗な見たことねー！！」

ツナは花畑の美しさを目の当たりにして、圧倒されていた。

「へっへーん 参ったか」

「私達も初めて見た時も同じような感じでしたよ」

ツナの反応を見て、満足げに笑うロツテと、微笑むアリア。

ロツテ達二人は、もうすぐ旅立つツナにこの光景を見せたかったの

で、彼を連れてきたのであった。

「色々忙しかったからねー。中々来れなかったけど…」

「直前に来れて良かったです」

花畑が輝くのは月に一度。満月の日のみであった。

しかし、ツナは悪天候や修業に追われ、機会をいつも逃していたのであった。

そして、偶然にも今晚がその日であったのだ。

「うん。ありがとう！」

ツナは大満足といった感じで二人に礼を言う。

「どう致しまして！」

「こちらこそ、一緒に来れて嬉しいです」

笑顔でそう返事をし、三人は再び大樹を見上げた。

「ツナ君、この樹に纏わる話し知ってる？」

樹を見ていた最中、アリアは唐突に切り出し、オレは首を振った。

「そっか…、ツナに教えてなかったっけ」

あはは、と笑いながら頭をかくロツテ。どうやらすっかり忘れていたらしい。

「それで、その話して何？」

「少し長くなるけどいい？」

「うん。大丈夫だよ」

「それじゃあ」

ロツテとアリアは、まるで詩を唄うように語り始めた

昔々、ある所に淋しがり屋の女の子がいました

淋しがり屋の女の子の両親は、女の子が小さい時、病気で帰らぬ人になってました

淋しがり屋の女の子は一人ぼっちで山奥に住んでいました

そんな境遇に同情したのか、街の人達は優しくしてくれました

しかし、淋しがり屋の女の子は『優しすぎた』のです

自分一人の為に、色々してくれる街の人達に申し訳なくなっていました

だから淋しがり屋の女の子は、何でも自分一人でやろうとして、街の人達に迷惑をかけないように努力しました

淋しがり屋の女の子は、『良い子』になろうとしたのです

最初は失敗ばかりでしたが、時間と共に淋しがり屋の女の子は一人でも出来るようになりました

しかし、それと比例して、街の人達は、淋しがり屋の女の子の家にあまり来なくなりました

皮肉な事に、淋しがり屋の女の子は、『良い子』になったがために、一人ぼっちになってしまったのです

淋しがり屋の女の子は、いつもこっそり泣いていましたが、誰にも迷惑をかけたくないと思い、街の人達の前では笑っていました

笑顔という仮面によって、自分を守っていたのです

いつしか、淋しがり屋の女の子は、自分の感情を表に出さなくなっていました

それから時間が経ち、淋しがり屋の女の子は大人になり、美しい女性になりました

ですが、相変わらず淋しがり屋の女の子は一人ぼっちでした

そんなある日の事です

家の近くの花畑で、眠っていた一人の青年に出会いました

見た所、青年は淋しがり屋の女の子と同じ年位でした

最初、淋しがり屋の女の子は青年を放っておこうと思いましたが、最終的に連れて帰える事にしました

そこから二人の生活が始まったのです

青年は、すぐに淋しがり屋の女の子の違和感に気付き、大空のように彼女を包み込み、時間をかけてゆっくり彼女を覆っていた氷を溶かしていきました

淋しがり屋の女の子は、徐々に心を開いていき、青年に惹かれていききました

ですが、淋しがり屋の女の子は思いを告げませんでした

何故なら、青年は違う世界から来た『魔法使い』だったからです

自分の思いに蓋を閉め、この夢がいつまでも続いて欲しいと願いました

それでも、覚めない夢はありません

遂に魔法使いの青年が自分の世界に帰る時がやって来ました

これから、大きな戦いが始まる。オレを待っている友がいる。そう
言って魔法使いの青年は、淋しがり屋の女の子の前から消えてしま
いました

淋しがり屋の女の子は、長年押し殺していた涙を流し、それが枯れ
るまで泣き続けました

淋しがり屋の女の子は、再び一人ぼっちになってしまいました

一人ぼっちになった淋しがり屋の女の子は、毎日のように花畑を訪
れました

雨の日も、風が吹く日も、雪の日も

ここに来ると、魔法使いの青年を思い出せるからです

それから一年後、ある晩の事です

淋しがり屋の女の子は、ある事に気付きました

花畑の大樹に、隠れて見にくくなっている箇所、魔法使いの青年
のメッセージが刻まれていたのです

それには、淋しがり屋の女の子に対する想いが書かれていました

それを読み終わると、彼女をうづくまり、涙を流しました

君に会いたい

君の声が聞きたい

君の隣にいたい

君にこの想いを告げたい

彼女は初めて、自分の気持ちを口にしました

その瞬間、空を覆っていた雲が晴れ、満月が顔を出し、花畑が輝き
辺り一面を照らしました

すると、ふと背後から懐かしい香りがしました

淋しがり屋の女の子は、恐る恐る振り向くと

そこには、この一年忘れる事が無かった、あの温かい笑顔でした

「こうして、二人は結ばれたのです」

話しを締め括ると、ロッセとアリアは、表情を曇らす。

「?二人共どうしたの?」

オレは、二人に尋ねる。

「この物語、私達に似ていると思う?」

「うーん…、どうかな?」

そう言われても、正直ピンとこない。

そんなオレの様子を見て、ロツテ達は淋しそうに笑った。

「そう言ってる時点で、もう違っちゃって決まっちゃってるんだよね」

「ツナ君、私達、君の事が好きだったんだよ」

……………え?

「なっ!?!う、嘘だろ!?!」

今まで気付きもしなかった…

ツナの超直感は、自分に対する負の感情には敏感だが、好意とは正の感情には疎かった。

そのおかげで彼女いない歴19年という汚名を被ってしまったのである。

しかも、彼女達の第一印象も最悪だった筈だ。

その後、事の顛末を説明するとお話しという名のお仕置きが待っていた。

「たしかに、あれには困ったけど…」

「それ以外で、ツナ君の良い所、いっぱい知ってるよ」

神秘的な光が、ロツテ達の顔を照らす。その頬は、赤く染まっていた。

「目標の為に、ひたむきに努力する所」

「誰よりも優しい所」

「獅子のような、気高さを持つ所」

「大空のように、包み込んでくれる所」

「「そんな君が」」

「「大好きなんだよ」」

「…ごめん」

オレはそう返事を返すと、二人は優しく微笑んだ。

「いいよ。最初から分かったことだし」

「むしろ、スッキリしました」

オレはロツテ達の想いには応えられない。でも、それでも

「ありがとう…」

礼を言わずにはいらなかった。

オレの言葉が意外だったのか、ポカンとしている二人。そして、小悪魔的な笑顔を浮かべる。

「ツナ、何か勘違いしてない？」

「え？」

「別に、私達は諦めてませんよ」

「それって、どういう」

言葉を言い終わる前に遮られる。

ロツテの唇によって

一瞬か永遠か分からない時間が経ち、ロツテの顔が離れていく。

頭の中は軽くパニック状態だった。

そこに間髪いれず

アリアに唇を奪われた

「もう、会えないとはかぎりませんよ？」

「管理局なら、その気になればいつでも会えるしね」

ロッテ達は今までで、最高の笑顔を浮かべる。その笑顔にドキッとしてしまった。

「「覚悟してね」」

もしかしたら、この二人から逃げられないかもしれないな

標的 9：月夜の告白（後書き）

ミカサ「自分の文才の無さに絶望しました…」

レグルス「全くですね」

ミカサ「アサリになりたい…」

レグルス「アサリに失礼です。貴方には机の奥で眠っている、半年前に買ったピザパンがお似合いです」

ミカサ「いつそ殺して…」

レグルス「私がやりましょうか？」

レオーネ「ちよつとキツクない？」

レグルス「いえ、遅れた罰です。それでも甘い位です」

レオーネ「…最後のロツテ達のヤツだろ（ボソッ）」

レグルス「レオーネ」

よ け い な こ と を 言 う な

レオーネ「ガクガクブルブル」

レグルス「別に起こってないですよ。置いてきぼりくらった事も、あの雌共に遅れをとった事も、これっっっっっっっっっっっっっっっっちも怒ってませ

ん!?!」

ミカサ「…まあ、それよりも、次回からミッドチルダになります。
取りあえずこれから…」

全員「よろしくお願いします!」

標的10…ミッドチルダの歩き方(前書き)

正直自身ないっす…

標的10：ミッドチルダの歩き方

自動ドアが開き、一歩踏み出すとそこは高層ビルが建ち並ぶコンクリートジャングルだった。

「すっげー！」

初めて魔法世界、ミッドチルダに足を踏み入れたオレの感想は圧巻だった。

そんな光景を目の当たりにして、思わず感嘆の声を漏らしてしまった。

周りの人達は、田舎丸出しの反応にクスクス笑っていた。

『旦那、そんなお上りさんみたいにしっちゃあ、周りに笑われますよ』

と、半ば呆れ口調の声が右手の人差し指から聞こえ、視線を傾ける。

「なつ。だ、だってしょうがないだろ？こんな都会、久しぶりなんだから」

二年近く山奥に籠りっぱなしだったし。

『でも、私は少年みたいにキラキラしている主も好きですよ』

今度は薬指から励ましの声が聞こえる。

「アハハ…。ありがとうレグルス」

彼女(？)はいつもオレの事を励ましてくれる。なんて出来たデバ
イスなんだろうか。(ツナはレグルスの本心を知りません)

「それで、局の人は…」

グレアムさんから受け取った手紙によると、入口にオレがお世話に
なる部署の人がいるらしい。

だがそれらしい人物は見受けられなかった。

おっかしいなあ…

ガリガリと頭を掻きむしりながら手紙を再度確認する。

「って、あれ!？」

『どうしたんすか、旦那?』

「…待ち合わせ時間、十二時だった」

只今の時刻、九時。待ち合わせの時間より三時間も早く着いてしま
ったのである。

いくら早め早めといっても、これはいくらなんでも早過ぎた。

「まいったな…」

流石に三時間も待つのは堪える。どうするか途方に暮れていると、

「うね〜〜〜ん!!マ〜〜〜マ〜〜〜ど〜〜」
「〜〜〜!!」

女の子の泣き声が耳に入った。

「あれって…迷子かな？」

『恐らくは』

道の真ん中でわんわんと泣く女の子。だが、誰一人として女の子を話しかけようとしない。寧ろ避けているようだった。

まったく…、どこの世界も同じなんだな…

誰も、好き好んで厄介事を引き受ける事なんてしない。皆、『他の誰か』がなんとかしてくれると、気にも止めない。

それは間違いではない。ツナ自身も当て嵌まる節もある。

だが、目の前で誰かが困っている。誰かが泣いている場合は話しは別だ。オレが『他の誰か』になる

「どうしたの？」

オレは女の子に話しかける。因みに膝を地面に付けて視線を彼女と同じ高さにしていた。

視線を合わせる事で安心感を持ってくれるらしいが、ツナは無意識にそれを行う。彼はそういう人間だった。

そんなツナの思いが届いたのか、女の子は目を擦りながら答えてくれた。

「グスツ…グスツ…。ママと逸れちゃったの…」

ヒックヒックと、涙を擦る女の子。ツナはポケットの中から、ハンカチを取り出し、女の子の涙を拭いてあげた。

「それじゃあ、お兄ちゃんが一緒にママを捜してあげるよ」

「…ママが知らない人について行っちゃダメだって…」

ガクツと体勢が崩れそうになった。ちゃんと行き届いた教育は喜ばしい事だが、如何せんタイミングが悪い。

だったら、少し攻め手を変える。

「お兄ちゃん、初めてクラナガンに来たんだ。良かったら案内してくれないかな？」

「えーと…」

女の子は、オレの申し出に困っている。いくらなんでも、こういった場合にどうするか教えてはいないようだ。

そして暫く悩んだ末、

「…うん。いいよ、案内してあげる」

と、頷いてくれた。

オレは微笑み、女の子を肩車する。

「え！？お、お兄ちゃん！？」

突然の行動に女の子は驚きの声をあげた。

「これならママをすぐに見つけれるよ。それに、眺めもいいだろ？」

そう言うと、女の子はキョロキョロと辺りを見渡し、徐々に表情も明るくなる。

「うん！」

満面の笑みで頷く。やっぱり子供は笑顔が一番似合う。

「それじゃ行くつか。オレの名前は沢田綱吉。ツナでいいよ」

「私リオ！リオ・ウエズリー！」

しゅっぱつしんごー！と元気いっぱいのリオちゃんの号令の下、オシは歩き始めた。

「 という事は、ママと買い物最中に逸れちゃったのかな？ 」

「 うん…。多分…」

一時間近く歩き回ったが、結局親は見付けられず、リオちゃん行きつけのアイスクリーム屋のテラスで一先ず休憩していた。

因みにお金は、グレアムさんから少しだけもらっていた。

リオちゃんはストロベリーアイスを美味しそうに食べながら、事の顛末を話してくれた。

リオちゃんとそのお母さんはお買い物に出かけ、その最中にリオちゃんにはショールウィンドの可愛い服に目を奪われてしまった。そしてふと気付くと、お母さんは見当たらず動揺してしまい、リオちゃんは走り回ってお母さんを捜したが結局見付けられず、堪らず泣いてしまった所にオシに出会った。との事だ。

うーん…どうするかな…

手がかりもないんじゃ、行動のしようもない。

本音を言うと、ここでじっとしているのが一番ベストだ。リオちゃん行きつけということもあり、ここに来る可能性が高い。しかし、案内してもらっている建前で、それは出来ないし、彼女もこの状況を楽しんでいるようだった。

「ツナ兄、次行こう！」

「あ、うん。わかった」

あれこれ考えている内に、リオちゃんはアイスを食べ終えたらしく、オレの手を引っ張る。

とりあえず、リオちゃんに最後まで付き合っただけよう

彼女に手を引っ張られ、アイスクリーム屋を後にした。

更に一時間後、オレ達は洋服屋に来ていた。リオちゃんが母さんと逸れた場所だ。ここなら、リオちゃんの母さんが来る確率が最も高いだろう。

ふと、リオちゃんを見ると、可愛い服に目を輝かしていた。

やっぱり女の子なんだな

オレは今日一番の彼女の笑顔を見て、微笑む。女の子が可愛い服に心を奪われるのは、どこの世界でも一緒であった。

これなら安心だなと思ったオレは、リオちゃんから少し離れ、レジに向かった。

この服屋はクラナガンだけでなく、ミッドチルダの中でも有名らしく、店内にもかなりの客がいた。

ツナの見立てでも、どの服も、デザイン、機能性、材質も良かった。…その分値段も安くはなかったが。

不謹慎かもしれないが、彼女といた時間は楽しかった。だからお礼がしたかったのだが、ツナは女の子にプレゼントを贈った事が無かった。レグルスと財布に相談しながら、ツナなりのプレゼントを選んで購入したのだ。

この時のオレは、完全に気を抜いていた。

そのせいか、これから起こる事件も全く予想だにしていなかったんだ

標的10：ミッドチルダの歩き方（後書き）

ミカサ「すんません…。実は第四期を見てないません」

レオーネ「な、なんだって！」

レグルス「あなた、最低です」

ミカサ「しょうがないじゃない。そのまま六課に行かせるのなんだから、迷子の女の子イベントを考えたんだけど、オリキャラ出したくなかった結果がこれだよwww」

レグルス「リオちゃんにフラグがたつたらどうするんですか！これ以上ライバルが増えたらどう責任をとってくれますか！」

レオーネ「流石に幼女にフラグは…。旦那ならやりかねん…」

ミカサ「しかもオレ的にも、ドストライクなんだよね、彼女」

デバイス達「うわー…」

ミカサ「いや、恋愛感情とかは無いよ。あくまでも、幼女は愛でる物だよ。どっかのハゲも言ってたじゃん」

デバイス達「……………」

ミカサ「はっはっはっ。そんな冷たい視線を送っても無駄だよ。私は幼女を愛しているからね。…そろそろ時間のようだそれじゃ、これからも私達を…」

全買「よろしくお願ひします！」

標的 11 : テロ (前書き)

ジャンプやべえ!

標的 11：テロ

首都クラナガン最大のショッピングモール『8inn1』には、生鮮食品はもちろんの事、お惣菜や家具、アクセサリなど、はたまた映画館や、和洋から中華などの様々なレストランまで供わっていて、様々な店が集合している。

ここに無ければクラナガンには無いとまで言われている程の規模を誇っていた。

その為、常にショッピングモール内は客で賑わっていて、他の世界から来る人も決して少なくはなかった。

その日も、いつもと変わらずにはじまりが、いつもと違う日となる事を誰も予想していなかったのであった

突如銃声が響く。

その突然の事態に、洋服屋の店員の女性は甲高い悲鳴を上げ、それが波及するように悲鳴が拡がった。

「あー…、あんまし騒がないでくれないかなー？」

先程、発砲した迷彩服とベストを着た25〜6歳程の赤髪の女性が再び天井に向かって発射。

状況を飲み込んだのか、先程とは打って変わって、静寂に包まれる店内。

「あー…、分かってっと思うけどあんたには『人質』になってもらうよ」

赤髪の女性がそう言うと、5人の同じ格好をした男達が店内に侵入し、店内に居た『一人を除く』全員を縄で縛り上げ、店内から連れ出した。

間違いない。これは『テロ』であった

大変な事になっちゃったな…

この事態にツナは内心溜息を吐いた。

いち早く危険を察知したツナは、素早く店内のトイレの天井からダクトに隠れたのだ。

「レグルス。外の状況は？」

ツナが尋ねると、目の前に画面が出現する。このシヨッピングモールのコンピュータールームにハッキングし、監視カメラの映像を持ってきたのである。

『武装した男女含め8名が出入口を封鎖した後、一階に居た21名を人質にし、エントランスに集めています』

「その中にリオちゃんは？」

『含まれています』

その言葉を聞いて頭を抱える。

ちよつと目を離れた隙に、リオちゃんを連れて行かれてしまった。自分が油断していなければ、自分がリオちゃんから目を離していなければと、自己嫌悪をする。

『旦那、分かっていると思いますが、リオちゃんは遅かれ早かれ、巻き込まれていました。それに』

「分かっているよ、レオーネ」

オレはリオちゃんだけじゃない。巻き込まれた人達を救うわなければならぬんだ。

「レグルス。ここからエントランスまで何分位かかるか？」

『およそ12分38秒です』

そう言うと、画面が切り替わり、目的地までの最短ルートが表示さ

れた。

「それじゃ、行こう。リオちゃん達を助けに」

私はやらねばならなかった。

例え勝ち目が無くとも、法を犯したとしても。

言わなければならなかった。

手に持つライフルを発砲した数分後、管理局の局員がショッピングモールを取り囲んだ。

当然だ。ここクラナガンには、地上本部がある。通報すればすぐに来るのは当然だった。

『貴様らは包囲されている！早急に人質を解放し、降伏しなさい！』
スピーカーを通して、局員の決まり文句の声が届いき、ほくそ笑む。
どこまでマニュアルが好きなんだ。と。

そこで、私は仲間の一人である男からマイクを受け取った。

「はろー。なんかようっすか？」

そんな私の態度に腹を立てたのか、局員は語尾荒く続ける。

「投降の意思が無いなら、我々もそれ相応の手段を取らざる得ない！」

「まー、それでもいいけど、こっちには人質がいるんだぜ？こっちの用件も聞いて貰えないっすか？」

「だ、誰が犯罪者の言う事など聞くか！」

無駄にプライドが高いんだよね、管理局の奴らって。ムカツクほどに。

そんなら…

「ほれ」

人質の女の子にマイクを近付けると、女の子は掠れた声で、

「助けて…、ツナ兄…」

と呟いた。

「リオ！リオーーー！！」

外で女の子の母親が叫ぶ声が聞こえ、母親はショッピングモールに駆け寄ろうとするが、局員に阻まれてしまった。

『くっ！貴様ら！何が目的だ！』

その光景を見て、堪らずスピーカーを持っていた局員の口調が荒くなる。

「こちとらの要望はただ一つ。事実を知って欲しいんだよ」

『事実…だと？』

「うん。そこにマスコミがいるでしょ？彼等にミッド中に私達の演説を流して欲しいんだ」

『なっ！？』

犯人達の申し入れに、思わず声を上げる局員。

「んで、どーすんの？」

『分かった。要望に応えよう。だが準備がある。少し時間を貰いたい』

何の躊躇いも無く、彼は頷いた。

「OK。それならいいや」

と、私はマイクを切った。

「ちよっ！？隊長どうしてですか！？」

彼の答えに納得していない局員が詰め寄った。

「何故犯人の要求を飲んだんですか？」

「何故か？私は他人の命を優先したまでだよ」

それでも納得していない局員に、話しを続ける隊長。

「全ての責任は私が負おう。その位の覚悟で任務に当たっている。君にその覚悟があるか？」

「い…いえ…ありません…」

彼は普段温厚な隊長の、凄みのある表情に圧倒され、何も言えなかった。

だが、この時はまだ彼等は甘く見ていた。

こういった事件は、過去にも事例がある。そのどれもが、魔法至高主義である管理局を罵る程度の、正直あまりダメージになる事はなかった。しかし、今回はそれとは違った。

運命の全国中継が間もなく始まる

彼女は質量兵器について語った。

ミッドには質量兵器＝必ず相手を殺す兵器といった認識をもっている。

だがそれは誤った知識だ。

とある世界ではゴム弾といった、殺傷力が皆無であるものも存在する。

なら、何故それを使わないのか？

何故、小さい子供を戦わせなければならないのか？

彼女は語った。

ここにいる者は、全員親しい者を亡くした者達だった。

両親、子供、親友が何故、死ななければならなかったのか？

何故、私の婚約者は死ななければならなかったのか？

それは私にもわからない。

そして、自分の無力を呪うと同時に、管理局を呪った。

魔法は相手を殺さないから使われている。それは分かっている。

だが、それでも使い手によれば相手の命を奪う事はたやすい。

なら、何故、どうして質量兵器はダメなのか？

どうして、魔法の力が無い人は戦う事が出来ないのか？

どうして、大切な人を失って、ただ見ているしか出来ないのだろうか

ツナは、その演説を一番近い店の影から聞いていた。

確かに、彼女の意見は正論だ。オレもそう思う。

だが、彼女のやっている事は間違いだ。

誰かを巻き込んだ時点で、彼女の主張は正論じゃなくなる。

自分自身で否定してしまっているのだ。

「レグルス、彼女達まで何秒位で着く？」

『1秒もかかりません』

「なら、犯人達が銃を構えて打つまで何秒位かかる？」

『彼等は恐らく、素人です。なのでおよそ7秒です』

という事は、7秒で8人を倒さなければならない。尚且つ人質を傷付けないように。

7秒という短い時間では、ツナにとって

「2秒で十分だ」

多過ぎるのであった。

標的11：テロ（後書き）

ミカサ「（「。。」）」

レグルス「一体どうしたのですか？」

レオーネ「そんな変な顔して？」

ミカサ「うおおお！！原作やべえ！山本やべえ！I世すげえ！水野おおお！！」

レグルス「ネタバレ禁止！」

レオーネ「やーまもとっ！やーまもとっ！やーまもとっ！」

レオーネ「…壊れてしまったようなので、私が代弁しますが、この作品は原作に近付けたいとの事で、少なからず手直しがあると思います。御了承下さいm（「——」）m」

ミカサ「みっずつの！みっずつの！みっずつの！」

レオーネ「…とまあ、拙い作品ですが、これからも…」

全員「よろしくお願ひします！」

標的12：願いと誓い（前書き）

ちよつと遅れてスンマセン

標的12：願いと誓い

ショッピングモール立て籠もり事件の現場に当てられた部隊に一人だけ違う部隊の人間がいた。

彼女の名は八神はやて。古代遺物管理部、『機動六課』の部隊長を勤める才女だ。

今日、彼女はグレアムの推薦による凄腕の魔導師を迎える予定だった。彼女は心が弾んだ。いくら陸・空・海のエースクラスや将来有望な若手を集めても、やはり新設。人手が足りなかった。そこに凄腕の魔導師が来るなれば願ったり叶ったりだ。しかも、民間協力者の扱いで魔力ランクをいじる必要も無い。言うこと無しだ。

そして、彼女は意気揚々と六課を出発したのだが：

そこで今回の事件である。たまたま近くにいたという事で応援の要請が入り、今回当てられた部隊に加わった。

彼を長時間待たせる事になるが、しょうがないと割り切る。一先ず目の前の現状に集中する。

実際、そんな事も気にしていられない程の処理が求められた。演説が始まった途端、抗議の電話が殺到した。それもテロ集団に対してでは無く、『管理局』に対してであった。

その内容はどれも、管理局が質量兵器の詳細を黙秘していた事だった。

演説に感化され、各地で管理局を批判するデモが発生されたと報告された。

それにははやてが所属している機動六課も含まれていた。

管理局の歴史に載るような大事件に、誰にも手を付けられない程に発展してしまっていたのであった

『主、行きますか？』

「いや…まだだ」

とある店の一角の物陰に隠れているツナは既にバリアジャケットを纏い、出るタイミングを計っていた。

いくら一瞬でケリが着くといっても、リオちゃんを含む、人質達に気が向いていたら怪我を負わせてしまう可能性が少なからずある。

テロ集団全員が人質から気を離す一瞬を狙い撃つ

そのタイミングを計り、全神経を集中する。

…どの位の時間がたったのだろうか。数時間かもしれないし、数分かもしれないし、はたまた数秒だったのかもしれない。

そして、その瞬間が訪れた

『行きますぜ、旦那!!』

ツナはカートリッジを使用し、橙色の魔力が爆発する。

その瞬間、橙色の風が辺り一面を吹き飛ばし、テロリスト達は壁に叩きつけられ気絶する。

「ツナ兄！」

リオちゃんがオレを見て喜びの声を上げる。

「リオちゃん、待たせてごめんね。すぐに助けるから。ちょっと待ってて…」

今すぐにも助けてあげたいが、それは出来ない。まだ、一人残っていた。

「まいったねー、流石管理局の犬」

テロ集団のリーダーの赤毛の女性が意識を飛ばさずに保っていた。

確実に首裏を手刀で捕らえていたが、凄まじい精神力で跳ね退けたのだ。

並の人間ではまず耐えられない。その位の力でやったのだが、彼女は耐えきった。彼女はそれ程の覚悟を持っている。それだけで、賞賛に値するのだが…

「…なんで、こんな事件を起こしたんですか？」

ツナは今にも泣きそうな位に顔を歪ませ問い掛けた。

それ程、彼女が事件を起こす人間には思えなかったし、哀しかった。

「貴女は、こんな事をするような人間じゃないはずだ」

「何でそー言い切れるの？」

彼女は言うことを効かない膝で無理矢理立ち上がり、根拠を聴いてきた。

「貴女は人質達の縄で絞めていたけど、緩めに絞めていた。苦しくないように。そして…」

「そして？」

「貴女はオレの友達に似ているんです…五月蠅い奴だけど、いつも明るくて、オレの事をどこまでも信じてくれる優しい娘に」

そう言い切ると、真っ直ぐに彼女の目を見つめる。これが嘘偽りの無いオレの気持ちだと分かって貰う為に。

そしてオレの思いが通じたのか、彼女は手に持っていたショットガンの銃口を下に向け、胸の内を語り始めた。

「私だってこんな事をしたくないよ……」

今までのふざけた雰囲気はどこかに消え、言葉を続ける。

「最初、私は街頭演説から始めたんだ。誰も傷付けたくなかったから……でも誰も聞いてくれなかったけどね」

アハハと彼女は困ったように笑う。でも、ツナには、その笑顔はどこか哀しんでいるように見えた。

「それでも、止めなかったよ。いつか分かってくれて信じてね。でもあの時何もかまバカらしくなっちゃったんだよね」

「あの時？」

「私のフィアンセが死んだ時」

「……………」

その言葉で辺りが沈黙に包まれる。ツナと彼女、人質、はたまた状況を見守っていた局員までも。

「彼はね、バカな位に真っ直ぐでね……よく命令違反ばかりやって

人を救ってばかりだった。そのせいで実力があるのに昇進も出来なかったけど、彼は笑ってたんだよ……」

『人の命を守れるなら地位も名誉もいらさない。みんなの笑顔を守る事が僕の誇りであり、覚悟なんだ』

彼は誰よりも優しく、誰よりも強かったのに……

「それなのに……それなのに最後は捨て駒なんて……！こんなバカげた話があるか……！」

そう叫ぶ彼女の目から涙が止めどなく流れる。

悔しかっただろう……憎かっただろう……

オレにも痛い程分かる。その気持ちが

裏の世界に身を置いているから、同じような現場を沢山見てきた。

抹殺

復讐

裏切り

あくなき権力の追求

目を覆いたくなるような光景を目にしてきた。

巨大組織という意味ではボンゴレも管理局も同じである。

巨大すぎる組織を維持するには、それに反する異分子を排除しなければならぬ。それも歴史と伝統が深いならその数は決して少なくは無いだろう。

実力があり、組織に不要であれば、良い捨て駒にされる。

組織を守り、尚且つ異分子を排除でき、一石二鳥という訳だ。

管理局にとって、彼は調度良い捨て駒だったのだろう。

管理局、無力な自分自身を憎むのも分かる。

それでも…

「誰かを守るの為に、誰かを巻き込むなんて間違っているよ。オレは、『みんな』を守りたい！誰かを守れたとしても誰かを犠牲にしたら、オレは死んでも死に切れない！」

過去に乗り越えた戦いにより、オレなりの出した答え。

そして、オレの願いであり誓い。

また『みんな』と笑いたいから、オレは拳をふるう

それがオレの戦う、たった一つの理由

正義の味方になる為の誓い

だから必ず、『みんな』を守る

「アハハ。だから私達の目論みも失敗したって訳だね」

彼女は苦笑を浮かべ、やれやれと頭を振る。そして懐に手を入れる。

『主！彼女の懐から金属反応です！彼女は自害するつもりです！』

「なっ！？」

レグルスの言葉に驚きの声を上げる。レグルスの言う通り、彼女はピストルの銃口を自身のこめかみに向けていた。

「じゃね、最後に話せてスッキリできたよ。ありがとね」

そう言っただけ彼女は微笑み、引き金に力を込めた

「…けるな…」

逃げるのか？

「…ぞ…るな…」

これだけの事をやっておきながら？

「ふざ…け…な…」

リオちゃん達を泣かせたのに？

「ふざけるな！！！！！！」

カランと薬莢が床に弾む音がエントランスに響く。

「ど…ど…して？」

赤髪の女性は驚きの声を漏らす。

目の前に、ピストルを握っているツナが佇んでいた。

「何で…私を助けた？」

彼女はツナに訪ねるが、

パアアアアン！

返って来たのは乾いた音だった。

戸惑う彼女を余所に、ツナは彼女に問い詰める。

「何故…逃げようとしたんですか！」

普段温厚なツナにしては珍しい程の剣幕だった。その位彼女の行動が許せなかったのだ。

「貴女には罪を償う義務がある！それなのに逃げるなんて絶対に許さない！」

オレは語尾を強め、感情を露にする。

「それに、貴女が死んだら、誰が彼の事を思い出してあげるんですか！貴女が死んだら、誰よりも彼が悲しむんじゃないんですか！！」

「！！！」

その言葉で彼女はやっと気付き、悟った。

自分の間違いに

彼の思いに反していた事に

見えていなかったモノに

「う…うあああああ！！」

彼女は膝を着き嗚咽を漏らし、ツナはしゃがみ、包み込むように彼女の肩を抱いた。彼女はまるで大空に包まれているような、暖かな心地に包まれたのであった

こうして、後に人々に語られる事となる『正義の味方』の最初の一

ページがめくられたのであった

標的12：願いと誓い（後書き）

ミカサ「ツナ、機動六課に着いたら何がしたい？」

ツナ「え、何いきなり？」

ミカサ「いや、もう少しで六課に着くだろ？そしたら纏まった金が入るじゃん。そしたら何したいかって」

ツナ「うーん…バイクに乗りたい…かな」

ミカサ「へー、バイクかー。数少ない取り柄だもんな」

ツナ「ほっといてよ！」

ミカサ「でもずっとバイクに乗ってないけど、乗れるのか？」

ツナ「大丈夫。高校生になってすぐにリボンからバイクの特訓があったからね。体が覚えているよ」

ミカサ「どんなふうに特訓したの？」

ツナ「ハハハ、フツウノばいくのレンシュウダヨ」

ミカサ「……………そうだね！」

ツナ「さて、物語もプロローグがあと少しで終わり、リリカルなのは物語に入ります！」

ミカサ「なのはファンの方々、もう少しの辛抱です！これからも……」

全員「よろしくお願いしますー！」

標的13：その後（前書き）

中身が無い気がする…orz

まあ、ともあれプロローグが終わってよかった

標的13：その後

テロリスト達が戦闘の意思が無いと判断した瞬間、武装した局員達がエントランスになだれ込んだ。

そして局員達は、三つの役割によって人員を裂いた。

一つはテロリスト達を拘束。

二つは人質の保護。

そして、最後は危険人物を取り囲む為であった。

「武装を解除し、両手を手の後ろに！」

「……………はい」

隊長らしき人物から、武装解除を命じられた通り、オレはバリアジヤケットを解除をした。

まあ、管理局で顔が利くグラムさんの推薦状があるから何も戦つ訳でも無い。そう判断したからだ。

「……今回の事は本当に感謝しているが、私は時空管理局の局員だ。素性の解らない者を無視する事は出来ない……すまない」

彼は本当にすまなそうに言い、隊員と共にオレを拘束しようと詰め寄る。

「ちよっ！待って！確かここに推薦状が……無い！どこかに落としたのか！？何でこのタイミングに……！！！」

もし、管理局に連行されたらマズイ。自分がこの次元世界の出身ではない事がばれ、それが原因でオレの世界の事がばれるかも知れない。

グラムさんに連絡したらしたで、それはそれで恐ろしいのだが。

『旦那！どうすんですか！』

『主！御決断を！』

「ちよっ！二人とも、他力本願……っ！！！」

レオーネ達がまくし立て、余計パニクるツナ。だが、現実是非情だ。あわてふためくツナに近く局員達。

マズイ。本っ当ーに、マズイ。

「悪いが、一緒に来て貰うよ」

局員が手錠を掛けようとした、まさにその時だった

「ツナ兄を虐めないで！」

「なっ！君は！？」

局員は想定外の事態に戸惑った。

オレと局員にの間に、リオちゃんが割って入って来たのだ。

「リ、リオちゃん！？どうしてここにー！」

突然現れたリオちゃんを見て、思わず声を上げる。

彼女は管理局に向こうで保護を受けている筈なのに。

そんなオレの疑問も露知れず、リオちゃんは振り向き、ニパツと笑った。

「これ、ツナ兄がレジに行ったときに落としたのを届けに来たの」

リオちゃんの手におすすめ状の入った封筒があった。

ああ、リオちゃんへのプレゼントを買いに行った時に落としたのか！

リオちゃんは、オレが落としたりした推荐信を偶然拾っていたという訳なのだが…

「……………」

『見られていましたね』

『ガッツリ見られてたっすね』

……まあ、不幸中の幸いって事にしておう。

「ツナ兄、はい！これ！」

「うん。ありがとう、リオちゃん」

リオちゃんの頭を撫でながら、推薦状が入った封筒を受け取る。

頭を撫でられたのが嬉しかったのか、リオちゃんは、えへへと嬉しそうに笑った。

「所で、先程から君の言う推薦状とはなんだい？」

こちらの状況を確認していた局員が聞いてきたので、オレはグレアムさんの推薦状を手渡す。

「開けていいかい？」

「はい」

オレに確認した後、封筒を開封し手紙を取り出す。

その手紙を読んでいく内にみるみる表情を変える。無論、驚愕であった。

「あ、貴方が噂のグラム元提督の!？」

「は、はい」

噂の内容は良く分からないが、その通りだったので頷く。

すると、隊員達がどよめき、後退った。

グラムさん…貴方はオレの事をどう書いたのですか…？

その異常な光景に戸惑ったのか、リオちゃんは、オレのズボンを掴み、体をオレに擦り寄せた。

「ツナ兄ィ…」

リオちゃんは不安そうにオレの顔を見上げる。

「大丈夫、オレがついているよ」

その言葉に安心したのか、若干オレのズボンを握っていた力が緩く
なった。

と、ここで纏まったのか、隊長らしき同員が、オレ達の前に出てき
て、

「失礼しました！」

頭を下げた。

「事情を知らなかったとはいえ、すみませんでした」

「い、いえ。こちらこそ、勝手にやってしまっすすみません」

あの時は、これが一番の手段だと思ったけど、よくよく考えると、
同員に一言連絡を入れたほうが良かったかも知れなかったので、
こちらにも否がある。

「ともあれ、無事に事件が解決が解決出来て良かったです」

「はい」

そう好意的に会話をする隊長も、内心は正反対の感情を抱いていた。いくらテロリスト達に敵意が無かったとしても、これだけの規模で怪我人一人出ないのは奇跡を超越している。

それを、目の前のまだ年若い青年がやってのけたのだ。意識するなと言っほうが難しいだろう。

そんな様々な感情が飛び交う中、ツナはハッと何かを思い出した。

「あー…：すみません。今何時ですか？」

「えーと、もうすぐ5時になるが…」

袖を捲り、腕時計を確認する隊長の言葉を聞いた瞬間、絶句した。

「やばい！完全に遅刻だ！すみません、ちょっと用事があるから失礼します！」

急いで待ち合わせ場所に行く為、エントランスを飛び出す。

「なっ！君い！君と待ち合わせしている人物はそこに…」

隊長さんが何か言っているかよく聞き取れなかったけど、急いでいるのでやむを得ない。

「バイバーイ！また一緒に遊ぼうね！ツナ兄！」

リオちゃんが両手いっぱい手を振っている。あ、プレゼントを渡すのを忘れてた…

…さっき、リオちゃんのお母さんから連絡先を教えて貰ったから、今度会った時に渡そう！

辛い思い出となった今渡すより、最初から最後まで楽しかった思い出の時に渡す方が、リオちゃんにとってもいい筈だ。

今日みたいな辛い出来事は、彼女にとっても決して良いものではないだろう。子供は辛い思い出は『まだ』必要ない。なら、楽しい思い出をいっぱいプレゼントするのが、年上の役目だろう。

以上回想終わり。

その後、オレは死ぬ気で目的に向かった。

おまけ

「なっ！彼、行っちゃったんですか！？」

「ああ。私の呼びかけも聞かずに行ってしまったよ」

「はあ…。ほんまにせっかちなー。待ち合わせの人物がすぐそこにおったのに…」

結局、擦れ違った二人が会ったのは完全に日が暮れてからだったと
さ

標的13：その後（後書き）

ミカサ「最初に言っておく！リオへのプレゼントはサプライメントでする！」

レオーネ「ここで言っとかないと、無くなったって勘違いする人がいるかもしれないしね」

レグルス「ともあれ、長いプロローグが終わって本当に良かったです。やっと私達も本格的に戦えます。………もう空気とか言わせないです！」

ミカサ「自分の文才の無さに、何度挫折しそうになったことか……！だが、もうそれは終わりだ！死ぬ気でいくぜ！」

レオーネ「気合いが空回りしなければ良いけどな」

レグルス「全くです。まあ、何はともあれ、これからも私達を……」

全員「よろしくお願いします！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2695q/>

リリカル×フィアンマ

2011年3月15日12時10分発行